二〇二〇年　青年団　上演台本

眠れない夜なんてない

平田オリザ

磯崎健一　入居者（夫婦）
郁子　入居者（夫婦）
好江　娘・今日尋ねてきた
保奈美　娘・今日尋ねてきた

三橋　明　古くからいる入居者
恵美子　娘・しばらく滞在

杉原幸三　入居者（夫婦・現役ビジネスマン）
千寿子　入居者（夫婦）

中岡誠司　見学者の夫婦
直枝　見学者の夫婦（千寿子の同級生）

野間ひかる　本社からのガイド

沼岡勇人　短期滞在の夫婦
まゆみ　短期滞在の夫婦

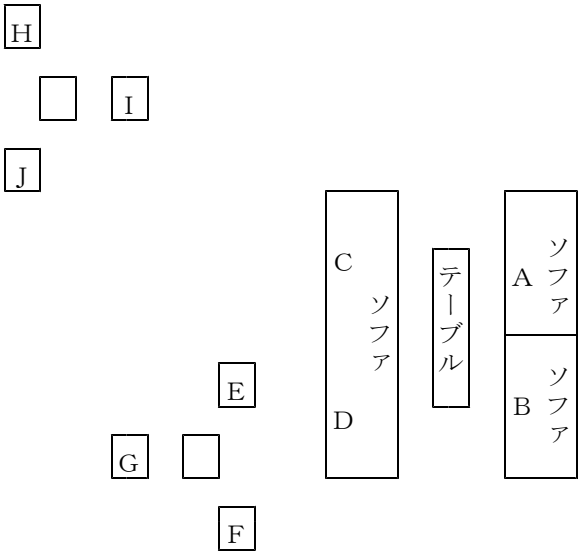
原口　充　ビデオの配達人

町田弥生　従業員

＊マレーシアの高地。
日本人向けの保養所のロビー。

一九八八年十二月

上手側にソファーセットが一組
下手側と奥に、丸テーブルと椅子が二組。



下手側が、保養所全体の出入り口。
上手側手前が、フロントやロビーの厨房、レストラン、その先にはフィットネスなどの施設があるらしい。
上手側奥が、それぞれのコテージに続いている。

0・0・1
開場時（開場時間は三〇分）
カセットデッキから音楽が流れている。
十五分後、杉原千寿子が、上手前から登場。
Gの椅子に座り、本を読んでいる。
三分後、町田、紅茶をもって上手から登場。

町田　お待たせしました。
千寿子　ありがとう。
町田　おまたせしました。
千寿子　どうも、
町田　失礼いたします。

＊一人、紅茶を飲んでいる。

三分後。
磯崎健一、上手側奥から登場し、下手に向かう。

健一　こんにちは、

千寿子　あぁ、こんにちは、

＊そのまま、健一は、下手に退場。

三分後、健一戻ってくる。
そのまま、ソファCに座る。
やがて近くの雑誌を手に取る。
しばらくして

千寿子　娘さん、今日いらっしゃるんですよね？
健一　　えぇ、まぁ、
千寿子　楽しみですね。
健一　　まぁ、楽しみっていうか・・・どうだか、
千寿子　・・・、

＊健一、そのままうとうととし始める。

開演時間の二分前。
三橋恵美子が、プールの道具を持って上手奥から
登場し、上手前方に。

恵美子　あれ？
千寿子　こんにちは、
恵美子　どうも・・・寝てるんですか？
千寿子　えぇ、たぶん・・・
恵美子　今日、娘さんたち、いらっしゃるんですよね。
千寿子　えぇ、そうみたい。
恵美子　眠れなかったのかな、昨日、
千寿子　あぁ、そうかもしれない。
恵美子　・・・

千寿子　プール？
恵美子　えぇ、ちょっと、
千寿子　いってらっしゃい、
恵美子　はい。

＊恵美子、上手前方に退場。

一分後、

千寿子　磯崎さん、風邪ひきますよ、
健一　　・・・
千寿子　（立って、そばに行って）磯崎さん、
健一　　はい、
千寿子　ここで寝ると、風邪ひきますよ。
健一　　あぁ、はいはい。
千寿子　意外と、冷房が強いから、
健一　　えぇ、えぇ、

＊千寿子は、自分の席に戻る。
やがて、また健一は、うとうととし始める。

開演
1・1・1
職員の町田弥生、上手前から登場。

町田　　・・・寝てらっしゃるんですか？
千寿子　えぇ、たぶん、
健一　　寝てませんよ。
町田　　あぁ、なんだ。
健一　　すいません、大丈夫です。

町田　いえ、あの、
健一　★さてと、
町田　そろそろお着きになる頃ですか？
健一　えぇ、さっき空港に着いたって電話があったんで、
町田　あぁ、
千寿子　ずいぶん、久しぶりですか？
健一　いや。上の娘は夏も来てたんで、
千寿子　あぁ、そうでしたね、
健一　下のは、えっと二年ぶりかな、あれ、
千寿子　★あぁ、
町田　あれ、じゃあ、二年以上お帰りになってないんでしったけ、日本？
健一　★いやいや、去年帰ったときは、下の娘がアメリカで、だんなの仕事の関係で、
町田　えぇ、
健一　すれ違いで、
町田　じゃあ、楽しみですね。
健一　まぁ、どうでしょう、
町田　そんな、
健一　家族が揃うのはね、滅多にないことだから、
まぁ、それは、
町田　えぇ、
健一　杉原さんのとこも、どなたかお見えになるんでしょう？
千寿子　えぇ、うちは友だちが、
健一　おぉ、
千寿子　来るっていうか、ここの見学に？
健一　え？
千寿子　☆ここか、どこか探してるらしいんです、
やっぱり、老後に住むところ、

健一　あぁ、
千寿子　それで、様子を見に来るらしくて。
健一　あぁ、なるほど、
千寿子　★友だちって言っても、それほど親しかったわけじゃないんですけど、たまたま連絡が来て・・・、
健一　あぁ、
町田　ご主人は、まだ？
千寿子　えぇ、あいかわらず、
健一　★蝶ですか？
千寿子　はい、なんだか、出かけるともう夢中になっちゃって、
健一　蝶はねぇ、マニアの人は、すごいですからねぇ、
千寿子　えぇ、他に、あんまり趣味もないもんですから、
健一　☆でも、まぁ、健康的ですよ。
千寿子　はい、まぁ、

＊上手奥から、磯崎郁子登場
1・1・2

町田　☆こんにちは、
郁子　こんにちは、
健一　おう、

町田　☆失礼します
（と言いながらソファBに座る）

郁子　やっぱり、ここいた。
健一　いるよ、
郁子　なに、落ち着かないんでしょう、
健一　えぇ？
郁子　もう、朝からそわそわしちゃって、
町田　あぁ、
千寿子　あぁ、
健一　そんなことありませんよ。
町田　でも、そうですよねぇ、
郁子　ねぇ、
健一　いや、そんなことないんだって、
町田　二年ぶりだって伺いました、さっき。
郁子　え？
町田　下の娘さんと、
郁子　そうそう、末っ子だし、そっちの方がかわいいから、
千寿子　えぇ、
健一　そうじゃなくて、新しい週刊誌でもあるかなと思ってさ、
郁子　あ、そう。
町田　すいません。今週はまだ。
健一　あぁ、いやいや。
郁子　まだよ、分かってンじゃない、
千寿子　それじゃ、
健一　あ、はい。
千寿子　中岡さんたち来たら、呼んでください、
町田　え？
千寿子　その、見学の、中岡って言うんです、友だち、
町田　あぁ、はい。かしこまりました。
千寿子　よろしく、
町田　はい。
千寿子　あ、あの、お借りしてた本、あとでお返しします。
郁子　あぁ、あぁ、いつでもいいですよ。
千寿子　☆ポストに入れておきましょうか？
郁子　そんな、もう読まない本ですから、
千寿子　じゃあ、また、
郁子・健一　えぇ、

＊千寿子、上手奥に退場。

1・1・3

町田　☆何か、お持ちしましょうか？
健一　いえ、大丈夫です。
町田　そうですか？
健一　えぇ、

健一　この前も、下のホテルに、すごい団体が来てたでしょう、
町田　え？
健一　蝶の、コレクターの、
町田　★あぁ、はい。
健一　あれ、中年男の虫取り網姿っていうのも、不気味ですよね、あれだけ、固まっていると、
町田　えぇ、まぁ、
町田　・・・
郁子　プールですか？
町田　ちょっと昼寝してたら、嫌な夢見ちゃって、
郁子　あら、
町田　なんだか、嫌な汗かいちゃったから、一泳ぎ

町田　しようかと思って、
健一　あぁ、えぇ。
郁子　★え、いまから？
健一　まだ着かないわよ、
郁子　え、でもさ、
健一　いいでしょ、別に、着いたって、すぐ逃げ
郁子　ちゃう訳じゃないし、
健一　そりゃそうだけど、
郁子　子どもじゃないんだから、
健一　はいはい。
郁子　ねぇ、
町田　夢って、怖いやつですか？
郁子　うーん、怖いっていうか、昔のね、子どもの
ころ住んでた家でね、うすぐらーい家だった
んだけど、そこに一人でぽつんといて・・・
もう永遠に一人だっていうのが分かって・・
・夢って、ときどきそういうことがあるで
しょう。あぁ、もう、ここにずーと一人だと
か、急に全部分かっちゃうの。
町田　あぁ、えぇ。
健一　なんだ、そりゃ、
郁子　あるじゃない、自分で納得しちゃうの。
健一　まぁ、あるかな、
郁子　この人は、どんな夢見ても、すぐ忘れちゃう
のよ。
町田　あぁ、そういう方もいらっしゃいますよね。
健一　一度、こないだ、セノイ族の夢判断を聞きに
行ったんだけど、そのときも僕だけダメでさ。
町田　あぁ、そうか。
健一　でも、覚えてないものは仕方ないよ。

町田　え、だけど、セノイの人たちに頼むと、だん
だん好きな夢が見られるようになるらしいで
すよ。
郁子　☆あぁ、
健一　☆それは聞いたんだけど、
郁子　もともと覚えてないんじゃねぇ、
健一　うん。
郁子　ダメでしょう、
健一　そんな、ダメダメいうなよ。
郁子　☆☆だって、
町田　☆☆でも、それもどうにかなるんじゃないか
な、
健一　え？
町田　ちゃんと覚えていられるようになると思うん
です、夢も
健一　うーん、でもなぁ、
町田　なんですか？
健一　忘れた方がいい夢もあるからなぁ、
郁子　フン、
町田　だから、それもコントロールするんですよ。
健一　え、それも、
町田　忘れたい夢だけ忘れるの、
郁子　☆そんな都合よく、
健一　☆なるほど、
町田　奥様は、上手くいったんですか、夢判断、
郁子　あぁ、それがね、
健一　★おまえの方がひどいよ、
郁子　いいのよ、
町田　え、え、なんですか？
郁子　それがね、私、その前の晩、夢に島倉千代子

町田　が出てきたのね、
郁子　え？
町田　島倉千代子、お千代さん、知ってるわよね？
郁子　はい、もちろん。
町田　だけど、通訳のガイドの人が、島倉千代子知らなかったのね、
郁子　あぁ、マレー人の通訳さんだったんですね。
町田　そうそう、で、その彼が、「美空ひばりじゃダメですか」って言うのよ、
郁子　あぁ、
町田　でも、全然違うでしょう、島倉千代子が夢に出てきたのと、美空ひばりじゃ、意味が、
郁子　★あぁ、うーん。
町田　★違わないだろう、
健一　そりゃ、あなたは、ひとの夢だから、そういう風に言えるけどさ、無責任に
郁子　そんな責任問われても、
健一　★で、なんだか有名な歌手が出てきたって通訳してくれたんだけど、それじゃあねぇ、
郁子　はい。
町田　だから、なんだか、答えも当たり障りがない
郁子　感じで、
町田　ああいうのは、みんな当たり障りのないこと言うんだよ、うらないっていうのは。
健一　★だって、「いつも、あなたの知らないところで、あなたを見ている人がいます」とか言うのよ。
郁子　ええ、
町田　そんなの、私だって言えるわよ。
郁子　まぁ、そうですね。
町田　第一、島倉千代子と全然関係ないじゃない。
郁子　はい。
町田　★がっかりしちゃった。
郁子　あぁ、残念でしたね。
町田　せっかく行ったのに、
郁子　そうだよ、
健一　高かったのよ、けっこう、ガイド料とか、
郁子　あぁ、じゃあ、私今度聞いておきます。もっと、いいところもあるみたいですから、ちゃんとしたの（立ち上がる）
町田　あぁ、お願いします。
郁子　はい。
町田　お仕事？
郁子　はい。そろそろ失礼します。、
町田　ごめんなさい、引き留めちゃって、
郁子　いえ、
町田　すいません、
健一　とんでもないです、私の方こそ、楽しいお話し伺えて、
町田　また、あとで娘、紹介します。
郁子　はい、ぜひ。
町田　えぇ、
郁子　じゃあ、失礼します。
町田　それじゃ、
郁子　失礼します。
町田

＊町田、上手前に退場。

1・1・4

郁子　・・・
違うでしょう、だって、人生いろいろと、川の流れのようにじゃ、
健一　え、なに、それ？
郁子　え？
健一　川の？
郁子　美空ひばりの新曲だって、
健一　へー、
郁子　こないだ、三橋さんに聞かせてもらった。
健一　あぁ、
郁子　川の流れのように、
健一　フン、
・・・
健一　たしかに、暗い家だったけど、おまえんとこは、
郁子　昔はもっと暗かったのよ、昼間でも、光が届かないから、
健一　うん。
郁子　ほら、昔って、昼間は電球なんてつけなかったじゃない。
健一　あぁ、そうかな・・・、
郁子　・・・本当に嫌いだった、あの家、
・・・
健一　でも、壊したのは、もったいなかったんじゃないの、いま思えば、
郁子　しょうがないわよ、だって、あんな家、掃除だけだってたいへんなんだから、
健一　まぁな。
郁子　外から見る分にはいいけど、
健一　ふん、

郁子　いま、新潟あたりでも、みんなマンションに引っ越してるんだって、年寄りが。
健一　へー、
郁子　ほら、雪かきがたいへんでしょう。昔なら、子どもと一緒に住んでたりとか、隣近所が手伝ってくれたんだろうけど、
健一　そうか。
郁子　いまだって、頼めないことないんだろうけど、年寄りの方が気をつかっちゃうのよね、
健一　うん。
郁子　越後湯沢に、二十階建てのマンションが建ったんだって、
健一　はぁ、
郁子　ほんと、
健一　誰が住むんだよ、
郁子　知らないわよ、
健一　泳ぎに行くんじゃないの？
郁子　行く行く、
健一　早くしないと、本当に着いちゃうよ。
郁子　行くって、
健一　うん。
郁子　（立ち上がりながら）今日、食事、どうする？
健一　え？
郁子　レストランでって言ってたけど、やっぱりコテージまで運んでもらった方がいいんじゃないの？
健一　あぁ、そうか。
郁子　その方が、ゆっくりできるでしょう、お互いに。

健一　そうだね、
郁子　話もしないといけないし、
健一　・・・☆まぁね、
郁子　頼んできますよ、ついでに。
健一　お願いします。
郁子　うん。

＊中岡誠司、直枝夫妻とガイド役の野間ひかる、下手から登場。
直枝は、大きな紙袋など持っている。
郁子は、立ち上がったままの中途半端な状態。
１・２・１

野間　☆どうぞ、お疲れ様でした。
誠司　はい、どうも
野間　こんにちは、
郁子　こんにちは、
野間　こんにちは、
健一・郁子　こんにちは、
誠司・直枝　こんにちは、
野間　（中岡夫妻に）☆☆あの、じゃあ、ここで、
そちらでお待ち下さい。
誠司　はい。

健一……☆☆いいよ、行って、
郁子……うん、行くけど、

野間　すぐ、こちらの係の方、呼んできますんで、
誠司　はい。
直枝　あの、

野間　はい、
直枝　杉原さんは、
野間　え、え、もちろん、すぐ呼んでいただきますので、
直枝　☆はい、すいません。
野間　いえ、ちょっとお待ち下さい、
直枝　はい。
野間　どうぞ、おかけになって、
直枝　えぇ、
野間　それじゃ、
誠司　よろしく、
野間　すぐ、戻ってまいりますので、
直枝　はい。
野間　（郁子に）失礼します。

健一……☆あぁ、あぁ、お友達だ、杉原さんの、
郁子……え？
健一……なんか、来るっていってたよ、さっき、
郁子……あぁ、そう。

＊野間、上手前に退場。
中岡夫妻、テーブルの方に座る。
１・２・２

健一　・・・・・
直枝　あの、杉原さんのお友達の？
健一　はい、えぇ。
直枝　あぁ、やっぱり、
健一　え、え？

健一　いや、さっき、ここでそういう話伺ってたもんですから、
直枝・誠司　あぁ、
健一　杉原さんから、
直枝　えぇ、
健一　さっきまで、ちょうど、そこにいらっしゃったんですよ、杉原さん、
直枝　あ、そうなんですか、
郁子　私、呼んできましょうか？
直枝　☆え？
健一　☆あぁ、まあ、でも電話で呼んでるだろう、
郁子　あぁ、そうか。
直枝　★大丈夫です。
健一　（直枝に）フロントから、
郁子　☆☆うん。
直枝　☆☆えぇ、はい。
郁子　隣のコテージなんですよ、杉原さんと、うちが、
直枝　あぁ、はい。
誠司　あぁ、
郁子　コテージが並んでるんです、点々と、
直枝　はい、あの、写真で拝見しました。
郁子　あぁ。
誠司　どうも、中岡と申します。
健一　あ、あ、すいません、磯崎です
誠司　よろしくお願いします。
健一　女房です。
誠司　よろしくお願いします。
郁子　こちらこそ、
・・・

健一　しばらく、いらっしゃるんですか？
直枝　いえ、今回は、ここは二泊だけで、
健一　あぁ、なんだ、
直枝　あと二カ所ほど回ってみることになってるんで、
健一　えぇ、少し伺いました。
直枝　あぁ、
健一　ロングステイの場所を探しにいらっしゃったんですよね。
直枝　えぇ、まぁ、
誠司　いや、まぁ、どうするかも決めてませんし、
郁子　あぁ、
誠司　あのー、今回は、旅行みたいなもんですね、旅行っていうか、旅行ですけど、
健一　☆えぇ、えぇ、
郁子　☆あぁ、
直枝　まだ定年まではだいぶあるんで、毎年旅行しながら、あれ、いい場所があればと思って、
健一　あぁ、そのくらいの気持ちの方がいいですよ、
直枝　はい。
誠司　退職も、早くするか、微妙なところなんで、
健一　あぁ、えぇ・・・
誠司　まぁ、今年は忘年会もないんで、早めに休みもらって、
健一　あぁ、なるほど、大変ですなあ、
・・・
郁子　杉原さんとは、あの？
直枝　★え？
健一　奥様とお友達だって、
郁子　えぇ、えぇ、それは、

直枝　あ、あ、高校の。中学、高校と一緒だったんで、クラスが一緒だったのは、高二の時だけだったんですけど、

郁子　あぁ、

直枝　その時は、けっこう一緒にいたんですよ、一年だけですけど、

郁子　あぁ、それじゃあ、

直枝　三年の時は、進路が違ったんで、

郁子　あぁ、そうですか。

誠司　・・・

健一　もう、こちらは長いんですか？

誠司　えーと、五年ですかね、今年で、

郁子　あぁ、

直枝　えぇ、

健一　★どうですか、こちらの暮らしは？

直枝　あぁ、まぁ、どうでしょう・・・

健一　え？

郁子　・・・

健一　これから暮らそうってお考えの方に、もー最高ですよー、絶対、日本帰りたくなくなりますよーとかって言うのも、無責任になっちゃいますからね、

直枝　はぁ、

健一　合う、合わないもあると思うんで、

誠司　えぇ、そうでしょうね。

郁子　え、もうちょっと、ポジティブに言った方がいいんじゃないの、

健一　いや、でもさ、

郁子　だって、

健一　いやいや、私たちはね、私たちは、来てよかったと思ってるんですけど、

郁子　はい。

直枝　えぇ、

健一　それは、あれで、人それぞれだから、

誠司　あぁ、もちろん、はい。

健一　すいません、参考にならなくて、

誠司　いえいえ、

健一　もっと具体的なことなら、なんでもお答えしますから、

郁子　はい。

直枝　あ、あ、私の聞き方がまずかったんですね、

健一　いや、そういう意味じゃなくて、

直枝　すいません。

健一　あ、いえ、

誠司　まぁ、どうですかとか聞かれてもねぇ、

健一　まぁ、それは、

郁子　食事のこととか、買い物のこととかなら

健一　うん。

直枝　ただ、だいたいのことは、事前の説明会とかで聞いてきたんで、

健一　えぇ、

直枝　だから、やっぱり、その実感って言うか、あれですよねぇ、

健一　★まぁ、そうでしょうね、

直枝　はい、やっぱり、どうですかあってとこが、

健一　・・・

直枝　まぁ、実感がないんでしょうね・・・

健一　・・・え？

誠司　中岡さんは、ゴルフは？

健一　えぇ、まぁ、多少、

健一　私、ゴルフもしないもんですから、
誠司　あぁ、
健一　朝起きて、散歩して、本読んで、あとテレビ観て、いやいや、すごい、衛星放送は。
誠司　えぇ、えぇ、えぇ、
郁子　まさかね、日本の番組がマレーシアで観られるようになるとはですね、
直枝　はい。
健一　まあ、でも、いまは、毎日、同じニュースばっかりですからね。
誠司　ああ、ええ。
健一　マレーシアで、陛下の下血が何リットルとか聞かされてもね、それこそ、それも、実感わかないし。
誠司　あぁ、まぁ、それは、
健一　戦争中のこと、ちょっと思い出しましたけどね。
誠司　あぁ、
・・・
健一　それで、夕方、スコールがやんだら、また女房と散歩して、飯食って、またテレビ見て、まぁ、そういう生活ですから。
誠司　・・・
健一　三食、日本食ですしね、
誠司　えぇ、
健一　ありがたいって言えばありがたいけど、やっぱり実感はないでしょう。
誠司　はぁ、
・・・

健一　まぁ、定年で日本にいても、似たような生活だったろうって思うんですけど、
・・・
郁子　そう言っちゃったら、あれだけど、
健一　★同期で、まだまだ働いてる連中もたくさんいるから、こんなこと言ったらバチが当たるんだけど、
誠司　いや、
健一　たまたま、親の代からの家があったもんですからね、子どもも娘だけだったんで・・・家を売って、
誠司　あぁ、あぁ、
直枝　やっぱり、少し、そういう余裕がないとダメですよね、
健一　えぇ、まぁ、そこら辺も、人それぞれでしょうけど、
誠司　えぇ、
郁子　☆バンコクあたりだと、年金だけで暮らしてらっしゃる方も、多いらしいですよ。
誠司　え、え、

＊野間、町田、上手前から登場。
1・2・3

町田　☆お待たせいたしました。
野間　★お待たせしました。
直枝　あぁ、
町田　★どうも、いらっしゃいませ、
直枝　こんにちは、

町田　こちらの副支配人をしています、町田と申します。
誠司　中岡です。よろしくおねがいします。
町田　支配人が休暇中で、日本に戻っているものですから、
誠司　はい、伺ってます。
町田　☆なにかと、至らぬ所もあるかと思いますが、
直枝　よろしくお願いします。
町田　どうぞ、おすわりください、
二人　はい。
町田　（健一たちに）失礼します。
健一　どうぞ、

野間　（すわりかけて健一たちに）☆失礼します。
健一　（頭だけ下げる）

町田　じゃあ、これ、さっそく、こちらが、コテージのキーです。
誠司　はい。
町田　☆☆こちらはパンフレットです。
直枝　あ、
町田　もうお持ちかも知れませんが、
誠司　★あぁ、はい。
直枝　えぇ、えぇ、
町田　ま、一応、
誠司　はい。

健一　☆☆あれ、好江たちの分はもらった鍵。
郁子　うん、大丈夫、
健一　あ、そう。

町田　コテージは全部で八棟です。いま現在は、六棟が入居なさっています。一組のご夫婦が、いま、一時帰国中で、あとシンガポールにご旅行になっているご家族がいらっしゃって、☆☆☆それぞれ、独立したコテージになっています。
野間　えぇ、

誠司　☆☆☆あぁ、佐々木さんとこ、長いね、
健一　なんか息子さんも来てるんだって、
郁子　へー、
健一

町田　☆今日泊まっていただくのはゲスト用のコテージです。それぞれのコテージにも、ゲストルームがありますから、ご家族とかは、一緒にお泊まりになりますけど、お知り合いがいらっしゃったときとかは、ゲスト用のコテージをお使いになります。

直枝　☆こちら、コーディネーターさんで、
健一　はいはいはい、
郁子　えぇ、よく、
野間　はい。
直枝　あぁ、そうですよね、。
二人　はい、

誠司　なるほど、
町田　あ、お荷物の方は、もうすでにポーターがコテージに直接運んでおりますので、

誠司　☆☆はいはい、それは／
直枝　★あの、あれ、杉原さんは？
野間　え？
町田　あ、あ、すいません。いま、いらっしゃるそうです、こちらに。
直枝　あぁ、
野間　ですから、こちらで杉原さんお待ちいただいてから、お部屋の、お泊まりになるコテージ方に、
直枝　えぇ、はい
野間　で、いいですか？
直枝　はい、もちろん。
野間　えぇ、じゃあ。

町田　今日は、レストランの方で、食事もご一緒に
誠司　と伺っておりますので、
町田　はい。
誠司　もうスコールもないと思うんで、テラスの方
野間　で、
誠司　はぁ、
野間　あぁ、今日あたり、夕日がもー最高ですよー、
誠司　あぁ、
野間　もう、あの夕日見たら、絶対に来たくなりますよー、
誠司　えぇ、
野間　ね、
町田　えぇ、そうですね。
直枝　はい、楽しみです。
町田　・・・
　　☆☆☆今日は、マレーシアの料理です。

直枝　はい。
野間　マレーの料理って言っても、ずいぶん、日本風にアレンジしてありますから、食べやすいと思います。魚がメインだし、
直枝　はい。
町田　中華やインド料理は、すぐ下の町にもあります。日本の食材は、注文しておけば、週に二回、クアラルンプールから届けられます。
直枝　はい、伺いました。

郁子　☆☆☆七時でいい、七時半？
健一　え？
郁子　私たち、食事、
健一　まぁ、まぁ着いてから聞いてみよう。
郁子　あぁ、そうか。
健一　うん。
　　・・・
健一　おまえ、プール行ってくれば、
郁子　あぁ、うん。
健一　うん。
郁子　（下手のグループに）あの、じゃあ、私は、
誠司　★あぁ、すいません、なんか、お引き留めしちゃって、
郁子　いえいえ、そんなんじゃなくて、
直枝　すいません。
郁子　いえ、
健一　ちょうど、プールに行きかけてて、
郁子　すいません、いつもこの時間に泳いでるんで、
直枝　あぁ、いいですね、

郁子　そんなんじゃなくて、まぁ、ラジオ体操みたいなもんですね。
直枝　えぇ、でも、そういうのが、いいですよねぇ、
郁子　はい、まぁ・・・じゃあ、
直枝　また、あとで、
郁子　えぇ、
誠司　どうも、
郁子　はい。

＊郁子、上手前に退場。
1・2・4

町田　プールと簡単なジムは、向こうです。
誠司　はい。
町田　短期滞在の方もお使いになれますので、
誠司　はい。
野間　プールも素敵ですよー、
直枝　はい。
野間　プールサイドで、デッキチェアーに寝そべって、カクテルなんか飲むと、もー日本なんか帰りたくなくなっちゃいますよ。
直枝　☆あぁ、

（立ち上がって、上手奥に向かう）

健一　☆すみません、お騒がせして、
誠司　いやいやいや、
健一　あぁ、すいません。
直枝　あとで、また、
健一　はい。
直枝　最高ですよー、夕日。
健一　・・・あぁ、あぁ、はい。

＊健一、上手奥に退場。
1・3・1

野間　・・・
誠司　えぇ、本当、最高なんですよ。
野間　・・・はい。
誠司　あの夕陽を見ていただければ、海外でのロングステイのすばらしさを実感していただけますよ。
野間　はぁ、
誠司　・・・
町田　それでは、明日のことは、杉原さんとご相談いただいて、
直枝　はい。
野間　ジャングルクルーズがいいかと思うんですけどね、
町田　★あぁ、いいですね、
直枝　でも、いっぱい歩くんですよねぇ？
野間　えぇ、まぁ、
町田　★途中までジープで行って、ピクニックだけっていうのもありますよ、お弁当持って、
直枝　あぁ、
町田　そんなジャングルっていっても、奥まで入らなければ、観光地ですから。
直枝　そうなんですか？
町田　えぇ、もちろん、
誠司　え、でも、虎とか出るんでしょう？
町田　あぁ、まぁ、出るって言いますけど、

誠司　うん。
町田　あんまり見たって話も最近は聞かないんで、
誠司　あぁ、そう。
町田　虎は、もう少し高いところにいるらしいんですね、
直枝　でも、じゃあ、やっぱりいるのよねぇ、
野間　あぁ、さぁ、
町田　まぁ、もし見られたら、ラッキーぐらいの感じで、危なくはありませんから。
誠司　あぁ、そうですか。
町田　蛇はときどき、
直枝　いやん、
町田　いえ、そんな、見かける程度ですから、被害が出たってことはないですからね。
直枝　あぁ、
野間　ぜひ、せっかくですから、
直枝　はい、じゃあ、まぁ杉原さんとも相談して、
野間　えぇ、あぁ、まぁ、あとは、何かな？
町田　え？
野間　明日、なにか？
町田　あぁ、あとは、まぁ、ゴルフとか、ご趣味に合わせてですね。
誠司　はぁ、
町田　テニスもプールも、一通りは揃ってますので、
誠司　でもなぁ、こっちまで来て、わざわざテニスしなくてもなぁ、
直枝　え、でも、そういうのがリゾートなんですよねぇ、
町田　まぁ、長期滞在の場合は、そういう、いろいろな趣味とかですねぇ、生かして、
野間　まぁ、でも今回は、せっかくですから、マレーシアらしいところを見ていただいて、
直枝　はい。
町田　明後日は、早くにお発ちなんですよね？
直枝　はい、えぇ。
町田　残念です。
野間　まぁ、今回は、下見なので、次はゆっくり、
町田　えぇ、
誠司　☆まぁ、こういうのは初めてですから、
町田　え？
誠司　こういう、そのリゾートの、滞在っていうか、
町田　あぁ、はい。
誠司　なんだか、どういう風にすればいいのか、ねぇ、
町田　☆☆え、そんな、あんまり決まりはないですから、自由に楽しんでいただいて、
誠司　だから、その自由に楽しむっていうのがねぇ、あんまりよく判らないから、
町田　あぁ、まぁ、そこはですから・・・自由に、楽しみを、見つけ出していただくっていうか、
誠司　うーん。
直枝　☆バクは？
野間　え？
直枝　バク、マレーバク、
野間　あぁ、いるでしょう、マレーだから。
直枝　あぁ、あぁ、

＊千寿子、上手奥から登場。
1・3・2

直枝　☆☆あ、来た。
千寿子　いらっしゃい、
直枝　（立ち上がる）やだ、シミチズ全然変わってない、
千寿子　だって、前に会ったじゃない、一度、何年前だっけ、
直枝　★そうだけど、あのときも変わってないって思ったけど、今日の方がもっと変わってない、高校の時から、
千寿子　そんな、
直枝　本当、若いから、
千寿子　やめてよ、高木さんも若いじゃない。
直枝　ひどーい、
千寿子　え、え？
直枝　えー、やっぱ、あれ、こういうところ来ると、若返る感じ？
千寿子　そんな、分かんないけど、
直枝　ねぇ、若いでしょう、
野間　あぁ、
直枝　同い年とかに見えませんよねぇ、
千寿子　そんなことないでしょう、
直枝　ほんと、ほんと、
千寿子　やめてよー、
町田　どうぞ、ここ（席を譲る）
千寿子　☆はい。
町田　どうぞ、
千寿子　はい（Gに座る）

直枝　☆まぁ、シミチズはねぇ、高校生の時から、かわいかったからねぇ、都会っ子で
（元の席に）
千寿子　・・・
直枝　あの、旧姓が、清水さんっていうんですよ、だから、清水千寿子で、シミチズ、
野間　あぁ、なるほど、
直枝　私が高木さん。
野間　あぁ、
直枝　あ、あ、うちの旦那です。
千寿子　ようこそ、
誠司　どうも、お世話になります。
千寿子　こちらこそ、
誠司　中岡です。
千寿子　ありがとうございます。
町田　・・・
直枝　でも、素敵ですねぇ、こうやって、何年も経ってから、マレーシアで再会するなんて、それが、驚いちゃったんだけど、同窓会の時に友だちから杉原さんが、こっちにいるって聞いて、連絡先を教えてもらったんです。
町田　あぁ、
直枝　ちょうど、ね、
誠司　え？
直枝　定年のあとは海外でとかって、少し話してたもんですから、本当に、ちょうどよくて、
町田　えぇ、
直枝　やっぱり、全然違うでしょう、知っている人がいるのといないのじゃ、
町田　そうですよねぇ、

直枝　ごめんね、なんか、こっちの都合で押しかけちゃって、
千寿子　そんなことないわよ、
直枝　本当、久しぶりなんですよ、会うのは、
野間　あぁ、そうなんですか、じゃあ、
直枝　同窓会にも、あんまり来ないもんねぇ、
千寿子　うん、まぁ、こっちいると、
直枝　あぁ、そうか、そうだよね、
千寿子　うん。
町田　それじゃあ、私は、また、後ほど、
誠司　☆あぁ、はい、ありがとうございます。
直枝　☆えー
町田　何かあれば、すぐお申し付け下さい。
誠司　ありがとう。
町田　まぁ、ほとんど野間さんの方で、ご案内いただけると思いますけど、
野間　はい。大丈夫でーす。
直枝　よろしくお願いします。
町田　こちらこそ、
野間　☆じゃ、
町田　よろしくお願いします。
誠司　あ、あ、すいません。
町田　はい。
誠司　ＦＡＸが来てるかもしれないんですけど、
町田　はい、じゃあ、来てたらお届けします。
誠司　お願いします。
町田　はい。
直枝　★株？
誠司　あぁ、
直枝　（千寿子に）なんか、最近、株はじめて、
千寿子　あぁ、
直枝　でも、こんなとこまでＦＡＸしてもらわなくてもいいでしょう。
誠司　でも、下がっちゃったらさ、まぁ、下がるってことはないんだけど、でも、上がってもらわないと、こんなとこ、これないよ。
直枝　まあね、それはそうだけど、
町田　失礼します。
誠司　お願いします。
町田　はい。

＊町田、上手前に退場。
１・３・３

直枝　★ね、ね、ね、ね、シミチズは虎って見たことある？
千寿子　え、あるけど、
直枝　え、本当！　すごーい、
千寿子　え、え、あるでしょう、だって、
直枝　え、ないわよー、
千寿子　えー？
誠司　あの、ジャングルでです。
千寿子　はい？
誠司　ジャングルで、虎、野生の、
千寿子　★あぁ、
直枝　そうそう、
千寿子　あ、ない、ないです。
直枝　でしょう、なんだー、うそつきー、
千寿子　そりゃ、ないわよ、そんなの。
直枝　ねぇ、

野間　えっと、じゃあ、夕食は七時過ぎで、よろしいですか？
直枝　あ、はい、
誠司　えぇ、
直枝　★私たちは、
野間　あと一時間ほど、ありますから、シャワーでも浴びていただいて、
誠司　☆はい。
直枝　☆（千寿子に）じゃ、バクは、マレーバク？
千寿子　バクもない、動物園でしか、
直枝　なんだ、
野間　杉原さんも、よろしいですか、お食事、七時で？
千寿子　はい、大丈夫だと思います。
野間　はい。
千寿子　もう、主人も帰ってくると思うんで、
直枝　あ、だんなさん、そういえば、
★千寿子　また、ほら、蝶を捕りに？
直枝　え？
千寿子　蝶、蝶、手紙で書いたでしょう、
直枝　あぁ、あぁ、
千寿子　☆なんだか、昔から虫取りとか好きだったみたいなんですけど、こちらに来てから、蝶にのめり込んじゃって、
誠司　あぁ、
直枝　☆蝶ね、
野間　えぇ、
直枝　チョートリニーって聞こえた。

野間　え？
直枝　チョートリニー、蝶を捕りにが、
野間　あぁ、あぁ、あぁ、
千寿子　もう、こっちいるときは毎日のように出かけるんです、
誠司　いいですね、
千寿子　どうでしょう、
誠司　ご主人は、クアラルンプールで、会社を、なさってるんですよね？
千寿子　★えぇ、まぁ、
誠司　コンサルタントの？
千寿子　まぁ、コンサルタントっていうか、書類の代行とかですね、日本の企業の。
誠司　あぁ、なるほど、
千寿子　ま、ですから、私たちは、ここに来るのは週末とか、長い休みの時だけですね。
誠司　えぇ、えぇ、えぇ、えぇ、
千寿子　あとは行ったり来たりです。
誠司　なるほど、
直枝　他の人もそうなの？
千寿子　ううん、他の人は、ここの、だいたい、ずっとここにいる人たち、もっと、やっぱり定年移住とかの人ですね、一番上の方で、七十代だと思います。
誠司　おー、
直枝　あ、そうだ、これこれ、
千寿子　え？
直枝　これ、持ってきたの、
千寿子　え、なに？

直枝　おみやげ、
千寿子　あぁ、
直枝　何にしようかと思ったんだけど、全然思いつかなくて、
千寿子　そんな、いいのに、
直枝　だって、こっちに何でもありますからって言われちゃって、
千寿子　あぁ、まぁねぇ、
野間　あぁ、すいません、かえって。
直枝　★いえ、そういう意味じゃなくて、
野間　あの、
直枝　でも、本当に何でもあるんでしょう。
野間　まぁ、クアラルンプールにはないものもありますけど、シンガポールかバンコクまで行けば、たいてい、
直枝　（そういっている間に、袋の中のチューインガムを机の上にぶちまける）
千寿子　これー、
直枝　え？
千寿子　ほら、懐かしいでしょう、
直枝　えぇ、あぁ。
千寿子　よく、買ってきてくれたじゃない、シミチズ、
直枝　あぁ、うん。
千寿子　あ、これ、フーセンガム、
直枝　うん。
千寿子　よく膨らませたでしょう、屋上で、学校の、
直枝　あぁ、
千寿子　そうしたら、すぐ禁止になっちゃったの、校則で、
野間　えぇ、
直枝　☆お嬢様学校だったから、一応、地元では。
野間　あぁ、
直枝　なんか、フーセンガムって、あんまりないのね、最近は。

＊と言っているところに、原口、下手から登場。
1・4・1

原口　△☆こんにちはー、
（と言いつつ、上手前に向かう）
千寿子　あぁ、
直枝　でも、かわりに高級なのも買ってきた。高級っていってもガムだけど、
原口　★（千寿子に）あ、こんにちは、
千寿子　あぁ、
原口　☆☆どうも、
千寿子　うん、
誠司　☆☆だから、やめとけって言ったんだよ、
直枝　え、なにが？
誠司　おみやげに、チューインガムなんて、
直枝　え、なんで、
誠司　だって、
原口　なんかありますか？
千寿子　あぁ、（直枝に）あ、この子、いろいろ下から運んできてくれる人。
直枝　え？
千寿子　ビデオとか、ＣＤとか、

直枝　え、え？
千寿子　日本の、ドラマとかの、録画した奴。
直枝　☆☆☆あぁ、あぁ、
誠司　☆☆☆あぁ、
原口　★まぁ、本当はいけないらしいんですけどね、たいてい。
千寿子　★日本のものは、たいてい買ってきてくれるんです。
直枝　うん。
千寿子　ＫＬか、必要があればシンガポールまで行って。
誠司　なるほど、
原口　☆こんにちは、
誠司　どうも、
千寿子　原口君、
原口　よろしくお願いします。
誠司　いや、あの、
千寿子　短期滞在だから、
原口　あぁ、あぁ、あぁなんだ、
誠司　ま、先々何かあれば、
直枝　☆ＫＬ、ＫＬ、
野間　はい。
直枝　クアラ・ルンプール、
野間　ええ、
直枝　私、最初、飛行機の会社かと思った。
野間　あぁ、
千寿子　こっちに住むか考えていらっしゃるんだって、
原口　ええ、

直枝　これ、あのいかがですか？
原口　え？
直枝　チューインガム、日本のだから、
原口　はぁ、
直枝　どうぞ、たくさんあるから、
原口　え？
誠司　よせって、
直枝　（千寿子に）いいわよね、
千寿子　え、ええ、
直枝　どうぞ、
原口　はい、ありがとうございます。
直枝　千寿子のだから、
原口　え？
直枝　杉原さんへのおみやげだから、お礼は、杉原さんに言ってください。
原口　はい。（千寿子に）ありがとうございます。
千寿子　いえ・・・はい。
誠司　すいません、どうも・・・、
直枝　あ、あ、じゃあ、野間さんにも、（と野間にもチューインガムを渡す）
野間　あ、ありがとうございます。
直枝　だから、お礼は、シミチズに、
野間　はい、ありがとうございます。
千寿子　・・・
原口　それじゃ、僕は、
千寿子　あぁ、町田さん、いるから、
原口　はい、先に行って、あとで荷物持って伺います。
千寿子　うん。
原口　ここ、いますか？

千寿子　うん、たぶん、
原口　はい。
千寿子　いなかったら、コテージ、
原口　はい。
千寿子　お願いします。
原口　はい。それじゃ、

＊原口、上手に退場。
1・4・2

直枝　はい、じゃあ、あとは全部、シミチズに、
（とチューインガムを千寿子に渡す）
千寿子　ありがとう。
誠司　なんだかねぇ、
直枝　いいのよ、二人の思い出なんだから、
誠司　ご迷惑そうだよ、
千寿子　いえ、
直枝　そんなことないわよねぇ、
千寿子　はい。
直枝　ほらー、もー、いいんだから。
誠司　★彼が、一週間に二回来てくれるんですか？
野間　あ、え、いえ、あの子は違うんです。
誠司　あぁ、
野間　それは、ホテルの方のサービスです。一週間に二回、
千寿子　★まぁ、そっちに頼んでもいいんですけど、
誠司　えぇ、
野間　あの、それはフロントで頼めます。
誠司　はい。
千寿子　お米とか、そういうものは、頼むんですけど、
簡単なものは。
誠司　えぇ、
直枝　お米はね、配達、うちも、いまも、
野間　えぇ、
千寿子　★面倒くさいものとか、探して欲しいもので
すね、彼に頼むのは、
誠司　あぁ、じゃあ、便利屋さんみたいな、
千寿子　えぇ、えぇ、
誠司　なるほど、
直枝　便利ねぇ、
千寿子　えぇ、
誠司　・・・そりゃ、便利屋だからなぁ、
千寿子　いや、便利屋さんって訳でもないんですけど
ね。
直枝　え、でも便利じゃない。
誠司　だから、便利だって言ってるだろう。
直枝　うん。
千寿子　便利屋さんってほどでもなくて、気が向いた
ときしか来ないから、
誠司　あぁ、なんだ。
千寿子　ただ、なんだか、マレーの人には頼みにくい
んですよ、細かいこととか。
誠司　☆はぁ？
直枝　☆だって、便利屋さんなのにねぇ、
野間　えぇ、えぇ。

千寿子　すごく、いろいろ親切にしてくれるんですけど、逆に、悪い感じになっちゃって・・・特に子どもとかだと、

誠司　あぁ、

千寿子　子どもに、大きな荷物とか持たせてる日本人とか見ると、嫌な感じになるでしょう。

誠司　あぁ、まぁ、それは。

千寿子　でも、それが、その子たちの仕事なんだって言われちゃうと・・・

千寿子　・・・だって、私とか、日本ではねぇ、スーパーの袋こーやってぶら下げて歩いてたのに、

直枝　私もよー、

千寿子　でしょう、

千寿子　・・・なんだか、私たちの世代って、慣れてないじゃないですか、一方的に人を使うのとか、

誠司　☆☆あぁ、まぁ、

千寿子　・・・まぁ、人を使うのはね、気を遣いますよね。男の人とか、お金持ちの家なら、別なんでしょうけど、

誠司　いや、男でも、最近は、

直枝　★でも、あの子だといいの？

千寿子　それが、不思議なんだけど、日本人だと、いい感じになっちゃうの、それなりのお金払ってるんだからって思えるから。

直枝　うーん、

千寿子　あぁ、そうそう、だからチップとかあげるのも、いやなんですよ、全然慣れないんですよ。すぐ、あげすぎなんじゃないかとか気にしちゃって、そうすると、お金で、何かあごで、お金で人使ってるような感じに思えてきちゃって、

誠司　えぇ、

直枝　不思議、

千寿子　まぁ、高木さんには、分かんないかも知れないけど、

直枝　え、え、どうして、分かるわよ、私、

＊そこに、三橋明、上手奥から登場。
1・4・3

明　★どうも、

千寿子　こんにちは、

明　（黙って、ソファに座る）

三人　こんにちは、

明　こんにちは、

野間　うちは、このコテージ内は、ノーチップ制なんで、

誠司　ええ、ええ、

野間　お気遣いなく、

直枝　はい。ききました。

野間　はい。

誠司　ご主人は、こちらで独立なさって？

千寿子　独立っていうか、まぁ、転勤でこちら来て、

誠司　えぇ、えぇ、

千寿子　★一度日本帰ったんですけど、こっちが気に入ったみたいで、
直枝　あぁ、蝶で、
千寿子　いや、蝶は、まぁ、それもあるかも知れないですけど、
直枝　うん、
千寿子　司法書士の資格を持ってたもんですから、
誠司　あぁ、それで。
千寿子　あと、こっちが合ってたみたいです。仕事で知り合った現地の方たちと、会社つくって、
誠司　☆でも、なかなか、
直枝　☆すごいわよねぇ、
千寿子　こちらに来る日本企業とかの、お世話をしています。
誠司　あぁ、
千寿子　★まぁ、でも、どうでしょう。うちは、子どもがいなかったんで、できたんだと思いますけど、
直枝　まぁねぇ、
誠司　★なかなか、
・・・
千寿子　三橋さん、
明　はい、
千寿子　こちらお友達で、
明　あ、あ、どうも、
誠司・直枝　こんにちは、
明　どうも、よろしくお願いします。
千寿子　短期で、二泊だけ、
明　あぁ、そうですか、
誠司　なんだか、あわただしいんですが、
明　いやいや、まぁ、そのくらいの方がね、
誠司　え？
明　長くいればいいってもんでもないでしょう。
直枝　そうですか、やっぱり、
明　まぁ、私は毎日、のんびり暮らしてますけど、
千寿子　あれ、恵美子さん、さっき、
明　えぇ、いま、プールにいると思うんだけど、
千寿子　えぇ、
明　これから、散歩にでも行こうかと思って、
千寿子　あぁ、それで、
明　はい。
千寿子　娘さんも、今いらっしゃってて、すごく仲がいいの、
直枝　あらー、
明　そんなこともないですよ、
千寿子　えぇ、だって、
明　まぁ、この歳で娘と仲がいいっていうのもね、
千寿子　そんな、
直枝　いいですよ、それは、仲がいい方が、
明　えぇ、まぁ、
直枝　ねぇ、
千寿子　うん。
野間　★それじゃあ、そろそろ、一度、
誠司　あぁ、はいはい。
野間　お疲れでしょうし、
誠司　☆いや、えぇ。
直枝　☆そうですね、
千寿子　じゃ、お願いします。
野間　☆☆はい。
直枝　☆☆え、シミチズは、行かないの？

千寿子　うん、だって、すぐ荷物広げたりなさるでしょう。
直枝　あぁ・・・、
千寿子　どうぞ、まず、ゆっくりして、
直枝　うん・・・ありがとう。
誠司　どうも、ありがとうございます。
千寿子　あとで、また呼んでもらえれば、食事前でも、
野間　はい、お願いします。
千寿子　たぶん、自分の部屋にいますから、
野間　はい。
誠司　それじゃ、
千寿子　はい。
直枝　またねー、
千寿子　また、
野間　行きましょう、
直枝　はい。
野間　こちらです。（明に）失礼します。
明　どうも、
二人　さよなら、
明　ごゆっくり、
野間　▲少し歩きます、
直枝　▲あ、はい。
誠司　▲ま、少しは歩かないとね、
直枝　▲そうね。
野間　▲ちょっと、坂道なんで、
＊野間、直枝、誠司、上手奥から退場。
2・1・1
千寿子　すいません、お騒がせして、
明　いえいえいえ、
・・・
千寿子　高校の時の、同級生なんです、女性の方が、
明　えぇ。
千寿子　すいません。
・・・
千寿子　ガムはお好きですか？
明　え？
千寿子　ガム、チューインガム、
明　いや、えーと・・・もう何年も食べてないな、
千寿子　あぁ、
明　食べるって言わないのか、あの、
千寿子　★友だちが持ってきてくれたんですけど、
明　あぁ、そうですか。
千寿子　こんなにあっても、
明　えぇ、
・・・
明　ガムがお好きなんですか？
千寿子　え、いえ、そうじゃなくて、
明　え、じゃあ、どうして？
千寿子　たまたま・・・たまたまっていうか、何か思い出があるみたいで、
明　あぁ・・・でもマレーシアにガムって言うのは、ちょっと、あれですよね、
千寿子　え？
明　だって、マレーシアって、ガムの原料輸出してますよ、日本に。
千寿子　え、そうなんですか？

明　たぶん・・・ほら、僕たちの世代は、子どもの頃、ガムみんな噛んでたでしょう、進駐軍の影響で、
千寿子　あぁ、
明　☆でね、国産のガムはまずいんだけど、だいたい原料がマレーシアとかね、インドネシアからの輸入で、
千寿子　へー、

＊沼岡勇人、まゆみ、下手から登場。
上手前に向かう。
２・１・２

勇人　☆△だから、もうすごいんだって、みんな坊さんが真っ赤になっちゃって、
まゆみ　△だから、それ変でしょう、
勇人　△どうして、
まゆみ　△だって変じゃない、そんなの、
勇人　だから、どうしてよ、
まゆみ　こんにちは、
明　★こんにちは、
千寿子　☆こんにちは、
勇人　☆こんにちは、
明　テニスですか？
勇人　はい、いま、終わって、
明　えぇ、
勇人　次、プールに、
明　すごいな、
まゆみ　もっと皆さんみたいに、のんびりできればいいんですけど、
明　いやいや、
まゆみ　なんか、せっかく来たんだからとか思っちゃって、
明　そりゃそうですよ。
勇人　すいません、騒々しくて、
明　いやぁ、
千寿子　楽しんでくださいね、
まゆみ　ありがとうございます。
勇人　行こう、
まゆみ　うん。
勇人　失礼します。
明　いってらっしゃい、
まゆみ　いってきます。

＊二人、上手前に退場。
２・１・３

明　・・・
千寿子　いいですね、若い人たちは、
明　えぇ、
　あぁ、すいません。杉原さんもお若いですけど、
千寿子　でも、私はあんな、
明　★まぁ、短期滞在の方はねぇ、
千寿子　えぇ、
　・・・
千寿子　三橋さんは、虎って、見たことあります、ジャングルで？
明　ジャングルって、野生の？
千寿子　えぇ、

明　ないですよ。
千寿子　ですよねぇ、
明　だって、見るってことは、もう危ないってことじゃないですか、
千寿子　えぇ、まぁ、
明　そんな、
千寿子　じゃあ、マレーバクは？
明　あぁ、バクはね、僕はないけど、見た人いましたよ、たしか、昔、
千寿子　そうですか？
明　だいぶ前だったけど、
千寿子　へー・・・でもバクって見ると、夢食べられちゃうんでしょう？
明　え、あぁ、
千寿子　夢食べられちゃうって、なんか、いやですよね。
明　いやいや、バクは悪い夢だけ食べるんですよ。
千寿子　え？
明　バクは、悪夢だけ、食べてくれるんですよ。
千寿子　え、そうなんですか？
明　そうですよ、
千寿子　なんだ、私ずっと、バクは夢を食べちゃう嫌な生き物だと思ってました。
明　そんな、
千寿子　悪いことした、バクに、
明　えぇ、
・・・
明　でも、あれって、先に話の方があったんでしょう、
千寿子　え、どういうことですか？

明　夢を食べる空想上の動物がいて、それがバクって言うんですけど、で、あとから、バクに、バクって名前をつけたらしいですよ、
千寿子　そんな、
明　本当、本当、だって、こっちの人は、マレーの人は、バクが夢を食べるなんて言わないもん。
千寿子　えぇ、そうなんですか？
明　うん、たしか、
・・・
明　いまは、虎よりバクの方が珍しいみたいですけどね。
千寿子　そうですか？
明　虎はもともと多かったのかな、マレーの虎って言うくらいだから、
千寿子　あ、それ、何か聞いたことあります。
明　ハリマオ、
千寿子　え？

＊磯崎好江、保奈美の姉妹が、下手から登場。
２・２・１

好江　こんにちは、
千寿子　あぁ、こんにちは、
好江　こんにちは、
千寿子　磯崎さんの、娘さんですよねぇ、
好江　はい、おひさしぶりです。
千寿子　いらっしゃい、いま着いたの？
好江　はい。あ、こっちが妹です。
千寿子　あぁ、えぇ。

明　こんにちは、
二人　こんにちは、
千寿子　お父さん、呼んできましょうか？
好江　あ、いえ、分かりますから、
千寿子　え、そう、
好江　はい。
千寿子　荷物は、
好江　ポーターが直接、コテージの方に、
千寿子　あぁ、そうか、
好江　はい。

＊そこへ、磯崎健一、上手奥から登場。

保奈美　あ、
健一　おう、
好江　お父さん、
健一　いらっしゃい、
好江　うん。
健一　ベランダから、タクシーが上がってくるのが見えたから、
好江　あ、そうか。
保奈美　お久しぶりです、
健一　うん。
明　どうも、
健一　どうも、すいません、お騒がせします。
明　いえ、
健一　お隣の三橋さんと、杉原さん、保奈美は初めてだろう。
保奈美　はじめまして、
明　はい、よろしくお願いします。
保奈美　よろしくお願いします。
健一　一週間ほどいますんで、
明　えぇ、えぇ、
好江　よろしくお願いします。
明　はい。
健一　じゃあ、行こうか、
保奈美　あれ、お母さんは？
健一　いま、プールだ。
保奈美　あぁ、なんだ、
健一　もうすぐ上がってくると思うけど、
保奈美　うん。
健一　ま、とにかく、いったん、
好江　はい。
健一　それじゃ、
千寿子　はい、またあとで、
健一　また、
好江　失礼します。
保奈美　失礼します。
千寿子　はい、また、
好江　また、
明　ごゆっくり、

＊三人、上手奥に退場。
２・２・２

明　・・・
千寿子　嬉しそうですね、さすがに、
明　そりゃ、そうでしょう。
　　えぇ、
　　・・・

千寿子　ハリマオって虎のことですよね？
明　そうそう、マレーの虎、ハリマオ、
千寿子　それ、なんなんですか？
明　そういうヒーロー、そういうのがいたんです、戦時中、
千寿子　軍人ですか？
明　あ、それはね別、シンガポールを陥落させた、山下って将軍がいてね、それもマレーの虎って呼ばれてたんです。
千寿子　えぇ、
明　ハリマオの方はなんか、スパイみたいなもんだったんでしょうけど、
千寿子　あぁ、
明　戦時中に、なんだかヒーローに祭り上げられたのかな、
千寿子　・・・
明　僕たちの時代のヒーローですよ。
千寿子　へー、
明　たしか、それが、戦後にテレビのモデルになって、
千寿子　あぁ・・・バクはないんですか？
明　え？
千寿子　マレーの虎・ハリマオみたいに、マレーのバク、なんとか、
明　・・・マレーのバクじゃ、マレーバクでしょう。
千寿子　あぁ、
明　・・・
千寿子　あれ、娘さんたちは、ご存じなんですかね？
明　え？
千寿子　病気のこと、磯崎さんの、
明　あぁ、どうでしょう。
千寿子　・・・
明　知らせたから来たのか、知らせるために呼んだのか、
千寿子　そんなにお悪いんですか？
明　いや、私は、分かんないんですけど、
千寿子　えぇ、
明　聞けないでしょう、そんなに、詳しいことは、
千寿子　えぇ、えぇ、
明　ただ、こっちで死にたいっておっしゃってるみたいで、
千寿子　あぁ、でも、それは・・・、
明　うーん、難しいところなんですけどね、
千寿子　だって・・・ここじゃあ、
明　えぇ、
千寿子　・・・
明　病院だって、
千寿子　まぁねぇ、痛みが出始めたときに、そういうのが、あれなんだろうけど、
明　えぇ、
千寿子　まぁ、最後だけ、ＫＬとか、まぁシンガポールでも、
明　あぁ、いまシンガポールはすごいらしいですね。
千寿子　そうそう、華僑はみんな、シンガポールで治療するんでしょう。
明　はい、聞きました。

＊町田、上手前から登場して、上手奥に通り抜ける。
２・２・３

町田　こんにちは、
明　こんにちは、
町田　何か、お持ちしましょうか？
千寿子　いえ、私は、
明　僕も、大丈夫です。
町田　はい。
千寿子　あ、あ、磯崎さんのとこ、娘さん、お着きになりましたよ、
町田　あ、そうですか？
千寿子　えぇ、
町田　あ、じゃあ、ちょっとご挨拶に、あとで、
千寿子　えぇ、
町田　失礼します。
千寿子　また、
明　また、
町田　▲失礼します。

＊町田、上手奥に退場。

千寿子　・・・
　あの、じゃあ、マレーバクと、セノイ族が夢をコントロールするって話は、関係あるんですか？
明　え？
千寿子　さっきのバクの話、
明　あぁ、
千寿子　関係ないか、
明　まぁ、たぶん、
千寿子　現地の人が、そう呼ばないなら、
明　えぇ。
千寿子　・・・
　あれ、セノイ族の夢判断って、行きました、三橋さん？
明　あぁ、僕は行ってないです。
千寿子　あ、そうですか？
明　え、行ったんですか？
千寿子　いえ、うちは主人が、
明　あぁ、
千寿子　私は、そう言うの、ダメな方なんで、
明　でも、当たるの、あれ？
千寿子　当たるっていうか、そういうのじゃなくて、
明　えぇ、
千寿子　なんだかアドバイスをしてくれるらしいんですね、
明　はぁ、
千寿子　こういう夢を見たら、なんかに気をつけた方がいいとか、それも、人によって違って、
明　おぉ、
千寿子　ある人は、おばあさんが夢に出てきたら、ジャングルで蛇に注意とか。
明　なるほど、
千寿子　あと、夢をコントロールするんでしょう、
明　まぁ、それは聞きましたけど、
千寿子　えぇ、
　・・・
明　僕は最近、よく兵隊さんが出てくるんですよ、
千寿子　はぁ、

明　ここら辺で死んだ人たちかな、
千寿子　え？
明　あぁ、いや、すいません。
千寿子　え、いえ、
明　しかし、これは、バクに食わせるわけにもいかないですからね、
千寿子　☆あぁ、

＊杉原幸三、虫取り網を持って下手から登場。
２・２・４

幸三　☆ただいま、
千寿子　あぁ、お帰りなさい。
幸三　ただいま、
明　どうも、どうでした？
幸三　今日は、そんなに収穫ないですね。
明　あぁ、
幸三　こないだ、大きな団体が入って、荒らされちゃって、
明　あぁ、そうですか。
幸三　まぁ、日本から来る方たちはね、必死ですからね。
明　えぇ、まぁ、そうでしょうね。
幸三　★せっかく来たから、そりゃ、頑張っちゃいますよね、短期間で、
明　えぇ、えぇ、
幸三　気持ちは分からないではないんだけど、
明　えぇ、
千寿子　あれ、あなたも行ったのよね、セノイ族の、夢のやつ、
幸三　え？
千寿子　夢の、夢判断、
幸三　あぁ、（明に）ま、僕の行ったのは本当に、観光客向けで、
明　あぁ、ショーみたいなやつか、
幸三　そうそう、観光村です。日本から来た取引先の接待で、行ってみたんですけど、
明　あぁ、でも、それじゃあねぇ、
幸三　いまはもう、原住民のああいうのは、たいていい観光地化しちゃってるでしょう。
明　えぇ、そうですね、
幸三　★ダンスとかもね、そうとう奥に行っても、ちゃんと振り付け家がいるみたいですからね。
明　僕がこっちに来た頃は、まだ、けっこう野性的なところもあったんですけどね、
千寿子　あ、そうなんですか？
明　種族によってはね、危ないから、あんまり近寄っちゃいけないところとかもあって、
千寿子　へー、
明　まぁ、偏見も入ってるんだと思うんだけど、
千寿子　えぇ、
明　吹き矢で、ぴゅって殺されちゃうんで、
幸三　お、お、お、お、
明　あっちの紅茶畑の方なんか、ぜんぶジャングルだったんですよ、人が入れない。
千寿子　あぁ、
明　あれは、インド人ですか？
幸三　中国資本でしょう、働いてるのはインド系だけど、
明　あぁ、

幸三　原住民は土地を持たないからね、全部とられちゃうんだよ、
千寿子　うん。
＊原口、上手前から登場。
幸三　よ、
原口　どうも、
＊原口、そのまま上手奥に退場。
幸三　そうそう、だから観光村も、やってんのは中国系ですね、
明　あぁ、
幸三　なんだか恐山のイタコみたいな感じでしたね、
明　あぁ、
幸三　儀式を見せるって感じで、
明　そうですか、
幸三　まぁ、もともとねぇ、怪しいもんですから
明　ねぇ、ああいうのも、
幸三　え、え、どういうこと？
明　だって、セノイ族は夢をコントロールできるから、平和な民族だっていうんでしょう。
幸三　えぇ、
明　だけど、その本ちょっと読んだんですけどね、アメリカ人が書いたのかな、元は、学者が。
幸三　はぁ、
明　それが、セノイ族は平和な種族だから、警察も刑務所もないって書いてあんだけど、当たり前でしょう、それ。
幸三　え？
明　だって、他の原住民にだって、そんな組織はないでしょう、警察とか。
幸三　あぁ、そうか。
明　もともと未開の社会には、そんなはっきりとした、文明社会みたいな犯罪なんてないですからね。
幸三　あぁ、なるほど、
明　でも、何となく穏やかなんじゃないの、他の部族とかに比べて、
幸三　だから、そういうのが、そもそも偏見なんだって、
千寿子　え、どうして、
幸三　だから白人の都合で、こっちが野蛮で、こっちの種族は、ちょっとましとか、
明　あぁ、
幸三　言うこと聞くとか、
千寿子　こっちって？
幸三　いや、こっちっていうのはたとえば、
千寿子　えー？

43.　＊三橋恵美子、磯崎郁子、上手前から登場。
二人ともバスローブ姿で。
2・3・1

幸三　あれ？
恵美子　あ、いた。
明　おー、
恵美子　お父さん、大変、
明　え、なに？

恵美子　プールで、
明　なに？
恵美子　☆あの、
郁子　☆なんか、あのカップルいるじゃないですか、
　短期の、
明　あぁ、えぇ、
幸三　あぁ、
郁子　なんか、抱き合ってて、
幸三　おー、
郁子　いや、それが、ねぇ、
恵美子　はい。
郁子　最初、ちょっと、いちゃついてるくらいだと
　思ったんですけど、ちょっと、
幸三　え？
郁子　ちょっと限度を超えてるっていうか、
幸三　え、なに？
恵美子　ちょっといられない感じなんです。
幸三　あぁ、
郁子　町田さんに注意してもらおうかと思ったんだ
　けど、いなくて、
千寿子　そんなに、
郁子　まぁ、ほっといてもいいんだけど、
千寿子　あぁ、でも、
明　あ、あ、町田さんは、コテージの方だ、
郁子　あぁ、
幸三　どうしよう。
千寿子　あなた、行ってきてよ、
幸三　え？
千寿子　注意しに、
幸三　やだよ、
千寿子　どうして？
幸三　どうしてって、そんな、
千寿子　網は預かっておくから、
幸三　いやいや、そういう問題じゃなくて、
恵美子　★私、町田さん、呼んできます。
明　あぁ、じゃあ、一緒に行こう。
恵美子　うん。
明　おまえ、だって、その格好じゃ、
恵美子　だって、しょうがないよ、
明　そんな、
恵美子　▲もういいよ、部屋で着替えるから、
明　うん。（他の人に）じゃあ、ちょっと行って
　きます。
幸三　☆はい。

＊明、恵美子、上手奥に退場。

千寿子　☆私たちも探した方がいいんじゃない？
幸三　え？
千寿子　町田さん、
幸三　あぁ、そうか。
千寿子　行きましょう。
幸三　うん。
千寿子　（郁子に）ちょっと行ってきます。
郁子　はい、お願いします。
　・・・
幸三　（おみやげの袋を指して）なに、それ？
千寿子　▲おみやげ、中岡さんたちの、
幸三　▲あ、あ、もう着いた。
千寿子　▲着いたわよ、もちろん、

幸三　▲あ、そうか。
千寿子　▲うん。
幸三　▲え、え、それがおみやげなの？
千寿子　▲しらないわよ。

＊続いて、千寿子、幸三も、上手奥に退場。
郁子、呆然とする。
やがてソファーに座る。

十秒

上手奥から、チューインガムを膨らませながら、
原口充登場。
２・３・２

原口　なんかあったんですか？
郁子　うん、まぁちょっと、
原口　はぁ、（テーブル席に着く）
郁子　仕事は？
原口　いま、だから、ここで待ってるように言われて、
郁子　あぁ、そうか。
原口　はい。
郁子　・・・
原口　原口君は、お正月は帰らないの？
郁子　えぇ、まぁ、
原口　あ、そう。
郁子　はい・
原口　・・・帰りたくならない？
郁子　うーん、あんまりですね。
原口　そう・・・こっちが好きなんだ？
郁子　どうですかね・・・日本よりは、
原口　あ、そう。
郁子　えぇ・・・まあ、今年は、今帰ってもあれみたいですから、
原口　ああ、まあ、そうか。
郁子　・・・
原口　最近さ、「ひきこもり」って言うんでしょう、
郁子　なんか、登校拒否の子とか
郁子　え？
原口　・・・
郁子　原口君も、そうだったの？
原口　・・・
郁子　ま、そういう時期もありましたね、
原口　・・・
郁子　引きこもりってほどじゃないですけどね、
原口　うん。
郁子　外出てたし、
原口　あぁ、
郁子　買い物とか、
原口　・・・・・
郁子　（チューインガムを膨らませる）
原口　じゃあ、こっち来てよかったんだ。
郁子　あぁ、まぁ、どうでしょう。
原口　え？
郁子　こっちでも、似たようなもんですからね、
原口　え、でも、
郁子　外出るの、一週間に一回くらいですから。
原口　あぁ、
郁子　あとは、ずっと部屋の中で、ダビングとかし

てるんで、
郁子　そうなんだ、
原口　ま、でも、よかったと思います。働くようになっただけ、
・・・・
郁子　ご両親は、
原口　え？
郁子　喜んでる？
原口　うーん、まぁ、仕方ないっていうか、
郁子　・・・・
原口　家にずっといるのも、大変なんですよ、まわりも、自分も、
郁子　なにしてるの、その間は？
原口　え、
郁子　ゲームとか？
原口　まぁ、そうですね、うん、たいてい、
郁子　あれって、おもしろいの？
原口　まぁ、他にやることもないし。
郁子　あぁ、ごめんなさいね、いろいろ聞いちゃって、
原口　え、いえ、
郁子　ほら、うち娘だけだから、分かんなくって、そういうの、
原口　あぁ、
郁子　ちょっと興味あって、
原口　・・・でも、いま女の引きこもりも多いですよ。
郁子　あ、そう。
原口　はい。
郁子　でも、うちは、本当、すくすく育ってくれたからなぁ、
原口　はぁ、よかったですねぇ、
郁子　あ、あ、ごめんね、
原口　いや、まぁ親は大変ですよね、子どもがそうなっちゃうと、
郁子　うん。
原口　でも、どうしようもないんで、そうなっちゃうと、こっちも、子どもの方も、
・・・・
原口　ひどくなると、ゲームもできなくなっちゃうんですよ。
郁子　あぁ、そう。
原口　ファミコンのスイッチが入れられないんです。何にもできなくて、何にもなくなっちゃうんですよ、やることが、
郁子　あぁ、
原口　何にもしないんです、寝てるだけで、
郁子　あぁ、
原口　ジーとして、ときどきカップラーメン食べて、
郁子　うん。
・・・・
原口　布団かぶって・・・寝てるのか、起きてるのかも、よく判らなくなるんです、
・・・・
原口　そういうときは、夢見るのだけが楽しみになるんですよ。
・・・・
郁子　嫌な夢とかでも、ま、見てるときは、もちろん苦しいんですけど、それ思い出して楽しむ
原口　んです。じっとして、布団の中で、

郁子　あぁ、
・・・
原口　でも、引きこもりとかって、人生経験が少ないじゃないですか、
郁子　あぁ、
原口　だから、単純な夢しか見れないんですよ、
郁子　へー、
原口　他の引きこもりの奴に聞いてもたいてい同じなんですけど、
郁子　単純って、どういう？
原口　人を殺すか、殺されるかですね。
郁子　・・・
原口　殺される方が多いですけど、
郁子　うん。
原口　ときどき、反撃したりとか、

＊上手奥から、磯崎保奈美登場。
２・３・３

保奈美　お母さん、
郁子　あぁ、着いた？
保奈美　うん。
郁子　どう、疲れてない？
保奈美　・・・
郁子　なに、どうしたの？
保奈美　いつから、お父さん？
郁子　え？
保奈美　病気のこと、
郁子　あぁ、うーんと、
保奈美　何で、すぐ知らせてくれないの、
郁子　だって、だから呼んだんじゃない、
保奈美　そんな、（原口に）すいません。
原口　あ、いえ、
・・・
郁子　心配するだろうから・・・聞いたんでしょう、
すぐ、どうこうって話じゃないから、
保奈美　だって、でも、
郁子　見せればね、お父さんの、元気なとこ、その方がいいんじゃないかって、
保奈美　元気なの？
郁子　ちゃんと検査もしたし、
保奈美　え、でも、
郁子　ＫＬの大学病院、すごい立派なのよ、日本人の先生もいて、
保奈美　あ、そう。
郁子　だから、みんなで相談しようと思って、こっちで手術するか、日本帰るか、
保奈美　そんな、
郁子　だって、帰りたくないって言うんだもん、お父さん、
・・・
郁子　考えたのよ、私たちだって、どうするか。
保奈美　うん。
郁子　どうやって知らせるか、

＊好江、同じく上手奥から登場。

好江　あ、いた。
郁子　好江、
好江　うん。

好江　・・・
郁子　急に出て行っちゃったから、
保奈美　あぁ、
　　ごめん、
郁子　・・・
好江　お父さんは？
郁子　部屋にいる。
　　うん。
郁子　・・・
　　また、もう、二人で食事のあとにでも話そ
　　うって言ってたのに、
郁子　・・・
保奈美　病気のこと、
郁子　うん。
　　話したくなっちゃったのね、やっぱり、二人
　　の顔見たら、。
好江　元気なのかって、私がしつこく聞いたから、
郁子　フン、
保奈美　（下手に向かう）
好江　どこ行くの？
保奈美　ちょっと、外出てくる。
郁子　☆え？
好江　☆そんな、危ないわよ。
保奈美　大丈夫、このあたりだけ、
好江　☆☆そんな、
郁子　☆☆（立ち上がる）保奈美
保奈美　▲タバコ吸ってくるだけ、
好江　保奈美、

＊保奈美、下手に退場。

2・3・4

郁子　ちょっと、
好江　私、行ってくる、
郁子　え、私行くよ、
好江　だって、お母さん、その格好じゃ、
郁子　あ、ああ、そうか。
好江　だいたい、何でそんな格好してんの？
郁子　これは、いろいろわけがあんのよ、
好江　★えー？
郁子　いいのよ、
好江　着替えてきなよ、私、だいたい分かるし、こ
　　のまわりなら、
郁子　あぁ、うん。
好江　ね、
郁子　はい。
好江　行ってくる。
郁子　うん・・・気をつけて、
好江　はーい、

＊好江、下手に退場。

郁子　じゃあ、私も、
原口　はい。
郁子　夢の話した、セノイ族に、それ？
原口　あぁ、いや、してません。
郁子　知ってるでしょう、夢判断の話。
原口　えぇ、
郁子　聞いてみればいいのに、
原口　まぁ、でも、こっち来てから、あんまり見な

くなりましたからね、そういう夢は、
郁子　あぁ、そうか。
原口　はい・・・少なくとも、殺す方は、
郁子　あぁ、そう。
原口　えぇ、
郁子　・・・それじゃ、
原口　はい。

＊郁子、上手奥に退場。

原口、ぼーとして、再びチューインガムを膨らませる。

十五秒

やがて町田と千寿子、上手奥から登場。

２・４・１

町田　△じゃ、私行ってきます。
千寿子　△はい。お願いします。
町田　すいませんでした。。
千寿子　いえいえ、私は、
原口　あ、
町田　いってきます。

＊町田、上手前に退場。

千寿子　お待たせ、
原口　なんですか？
千寿子　なんか、よく分かんない、（ソファに座る）
原口　はぁ、
・・・
原口　これ、おいしいっすね、
千寿子　え？
原口　チューインガム、
千寿子　あぁ、
原口　好きだったんですか？
千寿子　ううん。
原口　あぁ、なんだ。
千寿子　もっと、持っててもいいよ、たくさんあるから、
原口　え、あぁ。
・・・
原口　お友達ですか？
千寿子　え？
原口　さっきの人、
千寿子　あぁ、高校時代の、
原口　えぇ、
千寿子　友だちってほどじゃないんだけど、
原口　・・・はぁ、
千寿子　たまたま・・・こっち来て、
原口　チューインガムは、おみやげですか？
千寿子　知らないわよ。
原口　はぁ、
・・・
千寿子　じゃあ、一枚頂戴、
原口　え、あぁ、はい。
千寿子　大きいのね、一個が、
原口　あぁ、たぶん、これくらいないと、（渡す）はい。

千寿子　（ガムを受けとり）膨らむ、これ？
原口　まぁ、

＊そこに、上手前から、沼岡勇人、まゆみ夫妻、こそこそと登場。

原口　あ、
千寿子　（振り向く）あれ？
勇人　すいません、
千寿子　え、え、
まゆみ　★すいません、どうも、
千寿子　あの？
勇人　あの、どうぞ、プール、
千寿子　え？
勇人　申し訳ありませんでした！
（二人、頭を下げる）
まゆみ　申し訳ありませんでした！
千寿子　・・・？
まゆみ　失礼します。

＊と言いながら、二人、上手奥に退場。
２・４・２

千寿子　・・・
あの二人が、なんかエッチなことしてたみたい、
原口　はぁ、
千寿子　プールで、
原口　うーん、
・・・
ときどきいるみたいですよ、下のホテルのプールでも、羽目外しちゃう日本人。
千寿子　あぁ・・・
・・・
原口　どこもひどいですけどね、イギリス人とかも、観光客は。
・・・
千寿子　ガムって、たまに噛むとおいしいね。
原口　はい。
・・・
千寿子　シンガポールでは、ガムって禁止なんでしょう、
原口　へー・・・でも友だちとかいて、いいですよね、
千寿子　え？
原口　お友だち・・・僕いなかったから、

＊上手前から、町田弥生登場。

町田　あ、すいません。
千寿子　どうも、
町田　あの、沼岡さんたちは、えっと、
千寿子　え、え、あ、コテージの方に、
町田　あぁ、はい、
千寿子　反省してたみたいですけど、ずいぶん、
町田　はい。
千寿子　・・・大丈夫だと思いますけど、
町田　すいませんでした、どうも、
千寿子　いえ、私は別に。
町田　以後、気をつけますので、

千寿子　はい。
町田　失礼いたします。
千寿子　はい。

＊町田、上手前に退場。

原口　・・・・
千寿子　さっき、いろいろ聞かれました。
原口　うん？
千寿子　引きこもりのこと、磯崎さんの奥さんに、
原口　あぁ、
千寿子　まぁ、いいんですけど、

＊原口、チューインガムを膨らませる。
千寿子、立って原口に近づく。
千寿子チューインガムを膨らませて、原口のチューインガムと接触する。
くっついたチューインガムを、千寿子がすべて口に入れる。

千寿子　むずかしいね、膨らませるの。
原口　はい。
千寿子　・・・・
千寿子　友だちじゃないのよ、
千寿子　・・・・
千寿子　絶対、友だちじゃない。
千寿子　・・・・
原口　いつから学校行ってなかったんだっけ？
千寿子　中学三年です。
原口　うん、
原口　まぁ、二年から、ほとんど、
千寿子　私も、そんな風にできればよかった。
原口　・・・・
千寿子　買いに行かされてたのよ、チューインガム、
原口　・・・・
千寿子　本人は、全然覚えてないんだろうけど、
原口　あぁ、
千寿子　行かされたって言うか、行くんだけど、私が自分で、行かないと仲間に入れてもらえないから、
原口　・・・・
千寿子　学校で禁止されてるでしょう。だから、チューインガム噛むのが、仲間の印だったから・・・登校拒否とかあればよかった、私のころも・・・まぁ、いたんだろうけど、そういう子も、
原口　えぇ、
千寿子　うちの親なんか、そんなのしてたら、殴られてた。
・・・・
千寿子　七つのときに疎開してね、家族で、親戚の家に。戦争終わってからも、そこに残ったんだけど・・・それからずっと嫌いだった、田舎が。みんな、嫌いだった、
・・・・
千寿子　いいわね、いまは、何でも、きらいなことは拒否できて、
原口　ここ、来るんですか、あの人たち？
千寿子　え？
原口　住むんですか？

千寿子　あぁ、来ないと思うけど、
原口　そうですか？
千寿子　たぶん・・・絶対来させない。
・・・
千寿子　だって、やだもーん、
原口　まぁ、
千寿子　絶対、来させない。
・・・
千寿子　なーんか、どこまで行っても追いかけてくる
のよね、日本が、
・・・
千寿子　どうしたらいいと思う？
原口　いや、僕には、（明を見て）あ、
千寿子　え？

＊明、上手奥から登場。
２・４・３

明　どうも、
千寿子　あぁ、
明　落ち着いたみたいですか？
千寿子　はい、たぶん、こちらは。
明　★えぇ、（と言いながらテーブル席に座る）
千寿子　恵美子さんは？
明　いま、着替えてて、
千寿子　あぁ、
明　ちょうど、散歩行くところだったんで、
千寿子　えぇ、
・・・
千寿子　さっき、なんだか話途中になっちゃいました
ね。
明　え、そうでしたっけ？
千寿子　そう、夢の話、
明　あぁ、そうか、
千寿子　兵隊さんの、
明　あぁ、
・・・
千寿子　いえ、あの、すいません。
明　え、え、なにがですか？
千寿子　あの、そんないい夢じゃないんですよね、
明　うーん、まぁ、どうかな、
千寿子　え？
明　まぁ、ただ出てくるだけですからね、
千寿子　あぁ、
明　なんか、ぼやっとしてて、あんまり覚えてな
いんですよね。
千寿子　あぁ、
明　すいません。
千寿子　いえ、そんな、
明　えぇ
、
・・・
千寿子　え、でも、お兄様のこととか、
明　あぁ、それは、あんまり、
千寿子　え、
明　兄はここで死んだとも限らないし、
千寿子　え、そうなんですか？
明　えぇ、開戦の時は、一度は、ここら辺、通っ
てるんですけどね。
千寿子　あぁ、
明　それはたしかなんだけど、

千寿子　えぇ、
明　最後は分かんないんです、メチャクチャに
なっちゃって、
千寿子　あぁ、そうなんですか。
明　ここら辺も、もちろん、たくさん死んだみた
いですけどね、逃げるときだから、
千寿子　えぇ、
明　最近まで、遺骨収集の人も、来てたみたいで
すけどね、すぐ近くまで、
千寿子　あぁ、そうなんですか。
明　えぇ、
・・・
明　分かる、骨を拾いに来るの。
原口　え、あぁ。
明　みんなでね、家族が。
原口　でも、それ、誰の骨か分からないんですよ
ね？
明　分からない、まぁ、まとめて弔って、あとは
骨を分けるんだね。
原口　あぁ、
・・・
明　まぁ、骨なんて、分かんないですからね、
千寿子　えぇ、
明　うちの近所でね、戦争中に遺骨で戻ってきて、
戦争終わってから、本人が帰って来ちゃっ
たってことがあったんですよ。
千寿子　へー、
明　まぁ、帰ってきたんだから、めでたかったん
だろうけど、
千寿子　はい。
・・・
千寿子　それじゃあ、
明　あ、あ、はい。
千寿子　一度戻ります、うちに。
明　えぇ、えぇ、
千寿子　（原口に）あとで、うち来てください。
原口　はい。
千寿子　それじゃ、
明　えぇ、

＊千寿子、上手奥に退場。
３・１・１

原口　戦争って、あの戦争ですよね、
明　うん。
原口　あれ、三橋さんって、え、おいくつですか？
明　今年、還暦、
原口　あ、そうですか、
明　なに？
原口　もっとお若いんだと思っていました。
明　え、そう・・・それはどうも、
原口　あぁ、いや、
・・・
原口　お兄さん、ここで戦ってたんですか？
明　戦ってたっていうか、工兵だからね、
原口　はぁ、
明　工兵って言っても、あのね、銀輪部隊って分
かる？
原口　え、え？

明　マレーの銀輪部隊って言ってさ、あの、あれだ、戦争が始まって、ばーって日本が勝ったでしょう、
原口　はぁ、
明　勝ったんだよ、最初、まぁ、最初だけだけど、
原口　えぇ、
明　それで、マレー半島をね、イギリス軍を追いかけて、南下していくの、ごーっと、自転車で、
原口　は、え？
明　自転車だから、銀輪部隊、
原口　なんですか、それ？
明　まぁ、ジャングル進むのに、車より自転車の方がいいって言うんだけどね、
原口　えぇ、
明　あと、川に架かっている橋をさ、イギリス軍が壊して行っちゃうでしょう、
原口　はい。あぁ、逃げるために、
明　そう。それで、そうすると車では渡れないから、自転車担いで人力で渡るんだな。
原口　それ、でも、
明　★まぁ、いま思うと、変な話なんだけど、そのことはすごいニュースだったの、そのころは。
原口　あぁ、そうか、
明　皇軍の銀輪部隊、マレーを南下・・・シンガポールついに陥落・・・マレーの虎山下中将、敵将にイエスオアノーと決断を迫る。
原口　え、え、じゃあ、お兄さんも自転車に乗ってたんですか？
明　あ、あ、だから違うの。うちはね、自転車屋やってってさ、それで徴用されたんだな、工兵として、
原口　はぁ、
明　工兵って、普通、橋かけたりするのが仕事なんだけど、兄貴はたぶん、自転車修理してたんだろうね。
原口　はぁ、
明　・・・かっこうわるいけど、人、直接殺す仕事じゃないのは、まぁよかったのかな、
原口　えぇ、
明　最後は、どうなったかも分かんないんだけどね。・・・

＊恵美子、上手奥から登場。
3・1・2

恵美子　お待たせ、
明　おう、
恵美子　こんにちは、
原口　こんにちは、
明　行こうか？
恵美子　うん。
明　うん。
恵美子　あ、あの、次って、いつ来ますか？
原口　えっと、たぶん、来週の木曜日とかですね。
恵美子　あ、じゃあ、頼みたいビデオがあるんですけど、

原口　はい。
恵美子　いいですか、いま、お願いして？
原口　☆はい、
明　☆え、え？
恵美子　すぐ、すぐ、
明　いや、そうじゃなくて、
恵美子　なに？
明　だって、おまえ、いいの、帰らなくて？
恵美子　えぇ、どうして？
明　どうしてって、
原口　これに、よければ
（と注文を書くノートを取り出す）
恵美子　はい。（と書き始める）えっと、
明　恵美子、
恵美子　二つあるんですけど、日本で見てたのが、
原口　はい。
明　恵美子、
・・・
恵美子　帰らせたいの？
明　いやいや、そうじゃなくて、
恵美子　なに？
明　・・・まぁ、いいんだけど、
恵美子　うん・・・ひょうきん族、ずっとやってないんですよね。
原口　ああ、そうみたいですね。
恵美子　ねぇ、
原口　あ、そこは、書かなくても大丈夫です。
恵美子　あ、はい。
原口　代金は、あとでけっこうなんで、
恵美子　はい。
原口　ドルでも円でも、
恵美子　はい。
原口　はい。
恵美子　じゃ、それで、
原口　かしこまりました、
恵美子　お願いします。
原口　それじゃ、（明に）失礼します。
明　うん。

＊原口、上手奥に退場。
3・1・3

明　・・・
恵美子　本当に、いいの帰らないで？
明　いいって言ったじゃない、イベントの仕事、
恵美子　全部なくなっちゃったし、
明　まぁ、それは、そうなんだろうけど、
恵美子　だって、自粛がいつまで続くのかって話さえしちゃいけないんだよ。
明　まぁ、そりゃそうだろうな。
・・・
明　戸越のおばさんが、写真ぐらい見ろって怒ってたよ。
恵美子　えー？
明　電話かかってきたんだ、いきなり、朝の八時に。
恵美子　あぁ、
・・・
恵美子　いやよ、お見合いなんて、いまどき、

明　え、でも、そうでもないんだろう、最近は、
また。
恵美子　まぁ、そういう人もいるだろうけど、
明　★お見合いパーティーとかあるんだろう、いろいろ、
恵美子　★いやよ、そんなの、
明　★テレビで見たよ。
恵美子　えぇ、
明　ねる、ねる、
恵美子　でも、私はいい。
・・・
明　だって、いつまでも一人って訳にもいかないだろう。
恵美子　どうして？
明　だって、
恵美子　それこそ、変じゃない、今どき、
明　そんな、
恵美子　だいたい、私結婚したら、お父さん、どうするんのよ、
明　え、なに？
恵美子　いまは、元気だからいいけど、
明　それこそ、今どきだよ、そんなの、
恵美子　どうして？
明　いいんだよ、お父さんは、
恵美子　なにが？
明　お父さんは、ここでゆっくり暮らすんだから、
恵美子　だって、でも病気とかしたら、
明　大丈夫だよ、いまは、こっちだって、きちんとお医者さんもいるし、
恵美子　そんな、言葉だってできないのに、
明　そんなの、通訳さんに頼めばいいんだよ。
恵美子　ダメよ、そんなの、
明　どうして？
恵美子　★通訳なんて、上手く説明できないでしょう、細かいこと、痛いとか、かゆいとか。
明　かゆくはないよ、病気なんだから、
恵美子　例えば、かゆいのは例えば、
明　じゃあ言えるさ、痛いくらい、痛いーってやればいい、
・・・
恵美子　お父さんの側にいたいんだもん。
明　・・・それは、ありがたいけど、
恵美子　・・・ここも、気に入ったし、
明　でもね、いつかは帰らないと、
恵美子　・・・
明　今度は、だって、だから、僕が死んだときのことを考えてみればいいよ、
恵美子　え、なに？
明　このまま僕が死んだら、恵美子が一人になっちゃうじゃないか。
恵美子　そりゃ、そうでしょう。
明　だから、やっぱり結婚して、
恵美子　・・・いいよ。
・・・
明　散歩行くか？
恵美子　うん。
明　もう、涼しくなってきただろう、さすがに、
恵美子　★うん。
・・・
明　おまえ、帽子は？

恵美子　うん、もう大丈夫でしょう、
明　そうか、
・・・・

＊中岡直枝、上手奥から登場。
３・１・４

直枝　こんにちは、
明　あぁ、どうも、
直枝　あ、どうも、
明　ゆっくりできましたか、少し、
直枝　はい、おかげさまで、
明　えぇ、
・・・・
明　あ、これ、娘です。
直枝　あぁ、どうも、
恵美子　こんにちは、
直枝　こんにちは、（明に）かわいいお嬢さんで、
明　いや、
直枝　本当に、
明　杉原さんのお友達だって、
恵美子　あぁ、
直枝　はい。
恵美子　よろしくお願いします。
直枝　こちらこそ、（テーブル席に向かって歩いていき、Ｊに座る）
・・・・
明　じゃあ、お父さんに恋人ができたら、どうする？
恵美子　え？
明　恋人ができたら、恵美子は、邪魔になっちゃうよ。
恵美子　バカみたい、
明　どうして、
恵美子　いやらしい、
・・・・・・
明　いかがですか、こちらは？
直枝　思ったより、暑くないんですね。
明　えぇ、あぁ、まぁ、この時期は、
直枝　日本の夏より涼しいみたい、
明　まぁ、ここら辺は、標高が高いですから、
直枝　はい。
明　・・・あれ、ご主人は？
直枝　いま、シャワー浴びてて、
明　あ、あ、（恵美子に）下見にいらしたらしいよ、
直枝　はい。
恵美子　え、
直枝　下見っていうか、はい、まぁ、
恵美子　えぇ、
明　今日、お着きになって、
直枝　だから、今回は、そんなに長くいるわけじゃないんで、
恵美子　あぁ、

＊好江、保奈美、下手から上手奥に通り抜ける。
皆、お互いに、会釈をする。
・・・

直枝　娘さんとお二人、すごく仲がいいって伺いました。
恵美子　え、
直枝　杉原さんから、
恵美子　あぁ、
明　いや、どうでしょう・・・、
直枝　でも、いいですよねぇ、お二人で、
明　お子さんは、えっと、
直枝　はい、うちも、まだ大学生ですけど、
明　あぁ、
直枝　やっと、まぁ少し手もかからなくなって、
明　えぇ、
直枝　でも、うちなんか親のことには全然興味ないみたいで、
明　あぁ、
直枝　ま、男の子なんで、そうなんでしょうけど、
明　えぇ、
直枝　私の方が、子離れできなくて、
恵美子　あぁ、
直枝　子離れ、親離れ、
恵美子　子離れ、
直枝　えぇ、えぇ、子離れ、
明　えぇ、

＊沼岡勇人、まゆみ、上手奥から登場。
3・2・1

恵美子　あぁ！
勇人　あ、どうも、
まゆみ　すみません。
恵美子　え？
勇人　本当に申し訳ない。
恵美子　いや、えーと、
勇人　申し訳ありません！
まゆみ　申し訳ありませんでした。
恵美子　あの、まぁ、いいんですけど、
・・・
恵美子　どうぞ、よかったら、ここ、
（と空いている椅子を勧める）
勇人　ああ、いえ、
恵美子　わたし、こっちで
勇人　あぁ、はい、すいません。。
（二人、ＨとＩに座る）
・・・
明　明日、ご出発でしたっけ？
勇人　はい。
明　こちらも短期滞在で、
直枝　あ、あ、
まゆみ　こんにちは、
直枝　こんにちは、
勇人　こんにちは、
直枝　うちも明後日までなんです、
勇人　あ、あぁ、
直枝　今日着いて、
勇人　あぁ、それは、
明　沼田さんとこは、何日くらいいらっしゃいましたっけ、
恵美子　沼岡さん、
明　あ、あ、沼岡さん、
勇人　うちは五日間ですね、

まゆみ　はい。
明　おお、
勇人　正味四日、
直枝　あぁ、いいですね、
勇人　いや、
直枝　せめて、そのくらいあるとねぇ、
恵美子　えぇ、まぁ、
直枝　よくいらっしゃるんですか？
まゆみ　え？
直枝　こういうリゾートとか、
まゆみ　あぁ、いえ、初めてです。
直枝　あぁ、そうなんですか、
まゆみ　ま、ちょっと記念に、
明　あぁ、
直枝　え、え、銀婚式とか？
恵美子　あぁ、
勇人　いや、あの、離婚旅行なんです。
直枝　え？
まゆみ　はい。
・・・
勇人　離婚するんで、まぁ、最後に、記念に。
直枝　はぁ、
まゆみ　記念っていうかね、
勇人　お互い、恋人もいるんで、あれなんですけど、
・・・
恵美子　えぇ、でも・・・仲、いいですよね、
勇人　それが、離婚が決まってから、なんだか、盛り上がっちゃって、
恵美子　はぁ、
勇人　日を追うごとにですね。

まゆみ　はい、
恵美子　あぁ、じゃあ、でも、
勇人　離婚したら、他人だから、不倫じゃないですか、不倫っていうか、
まゆみ　まぁ、再婚したらね、
勇人　うん。
まゆみ　まぁ、再婚したら、もう付き合わないと思いますけど、さすがに、
恵美子　え、え？
明　それは、再婚っていうのは、誰と？
まゆみ　だから、今の恋人と、
明　あぁ、あぁ、
恵美子　あぁ、
直枝　え、じゃあ、お二人は？
まゆみ　え？
直枝　お二人が、再婚するんじゃなくて、
まゆみ　いえ、私たちは、離婚、
直枝　えぇ、えぇ、
まゆみ　これから、
直枝　はい。
まゆみ　離婚するから、ま、いまは夫婦なんですけど、気分としては不倫で、
直枝　あぁ、
勇人　で、盛り上がり、
恵美子　でも、再婚は、他の人と？
まゆみ　はい。
明　え、え、じゃあ離婚は？
まゆみ　離婚は、私たちが、もちろん。
明　あぁ、
恵美子　そりゃ、そうでしょう。

直枝　　え、え、じゃあ？

＊町田、上手前から登場。
３・２・２

町田　　沼岡様、
勇人　　はい。
町田　　それでは、あと十分ほどでお食事の準備ができると思いますので、
勇人　　はい、ありがとうございます。
町田　　テラスの方へ、
勇人　　はい。
まゆみ　ありがとうございます。
町田　　食前酒を、何かお持ちしますか？
勇人　　えっと、いいよね、
まゆみ　うん。
町田　　まぁ、テラスに移られてからでも、
勇人　　はい。
まゆみ　そうします。
町田　　かしこまりました。
勇人　　はい。
まゆみ　先ほどは、すいませんでした。
勇人　　すいませんでした。
町田　　いえいえ、
まゆみ　すいません。
町田　　あの、ただ、まぁ、ここは大人の社交場と言いますか、皆さん、静かに暮らしてらっしゃいますので、
二人　　すいません。
明　　いえいえいえ、

町田　　・・・
直枝　　中岡様、
町田　　はい。
直枝　　何か、食前酒でもお持ちしましょうか？
町田　　あぁ、じゃあ、はい。
直枝　　なにが？
町田　　カルディナールは、ありますか？
直枝　　ございます。
町田　　じゃあ、それ、
直枝　　かしこまりました。
町田　　お願いします。
直枝　　三橋様は？
町田　　僕たちは、これから散歩行くんで、
明　　☆あぁ、はい。
町田　　ありがとう。
明　　いえ、じゃあ、失礼します。
町田　　はい。

＊町田、上手前に退場。

直枝　　・・・
勇人　　☆もうお食事ですか？
直枝　　はい、今日は、ナイトサファリに行くんで、
恵美子　☆☆え？
勇人　　☆☆あぁ、
恵美子　早めに食事して、
まゆみ　あれ、いいですよ、ナイトサファリ、
恵美子　はい、楽しみにして来たんです。
直枝　　えぇ、
　　ナイト？

明　ナイトサファリ、
直枝　はぁ、
明　夜ね、ジープでジャングルを回ってくれるんです。
直枝　えぇ、
明　動物は、夜行性のが多いでしょう、
直枝　・・・
明　だから、夜の方が活発に見えるんです。
直枝　あぁ！
明　え？
直枝　ナイトなんとかって言うから、またエッチなんかかと思っちゃいました。
明　え、え、どうして？
直枝　だって、ねぇ、
恵美子　はぁ、
直枝　あ、あ、すいません、そういう意味じゃなくて、
勇人　え？
直枝　うーんと、意味は、あれですけど、
勇人　☆はい。
明　☆僕たちもそろそろ行くか？
恵美子　☆☆☆うん。
直枝　☆☆☆え、ナイトサファリですか？
明　そうじゃなくて、散歩に、軽く、
直枝　あぁ、
明　さっき行くつもりだったんだけど、
直枝　はい。
恵美子　行こう、
明　うん。
恵美子　暗くなってきちゃうし、
明　うん。
恵美子　それじゃあ、失礼します。
勇人・まゆみ　いってらっしゃい、
恵美子　行ってきます。
直枝　いってらっしゃい、
明　また、あとで、
直枝　はい。

＊三橋明、恵美子下手に退場。
3・2・3

直枝　・・・
まゆみ　動物もねぇ・・・
直枝　えぇ、
まゆみ　かわいいのは、かわいいけど、
直枝　はい。
まゆみ　・・・
直枝　もう届けは出されたんですか？
まゆみ　え？
直枝　離婚の、
まゆみ　いえ、まだです。
直枝　あ、ああ、あ、
まゆみ　はい。
直枝　あぁ、じゃあねぇ、
まゆみ　え？
直枝　やり直すとか、
まゆみ　そういうのはないですね、
直枝　え、そうですか？
まゆみ　はい。

直枝　え、どーしてー？
まゆみ　それは、まぁ、
直枝　・・・あぁ、
まゆみ　ね、
勇人　えぇ、ないない。
直枝　あぁ、
・・・
直枝　なんだか、杉原さんが、中学生の時、教室で飼ってた金魚の水槽をばーんてぶちまけちゃって、
まゆみ　あらら、
直枝　それで、なんか、金魚を手づかみで、全部戻したらしいんですけど、一人で、杉原さんが、
まゆみ　あぁ、
直枝　杉原さんらしいでしょう、なんかどんくさいっていうか、でも大胆っていうか、手づかみとか、
まゆみ　あの、杉原さんっていうのは？
直枝　え、あ、あの、あれです、千寿子さん、私の友だちで、
まゆみ　えぇ、えぇ、
直枝　あぁ、あぁ、いや、友だちで、ここに住んでるんです。
まゆみ　☆あぁ、
勇人　☆あ、
直枝　住んでるんじゃなくて、ときどき　だそうですけど、まぁ、住んでるんです。
まゆみ　あぁ、
直枝　たぶん、ご存じだと思います。
まゆみ　はい。

勇人　五日間だけなんで、名前と顔が一致しなくて、全部の方は、
まゆみ　☆えぇ、
直枝　☆はい。
勇人　五日っていうか正味四日、
まゆみ　はい。
・・・
直枝　結婚なさって、何年ですか？
まゆみ　十六年です。
直枝　あぁ・・・うちは、二十、えっと、三年です。
まゆみ　はい。
・・・
直枝　金魚も動物だから思い出しちゃって。思い出したっていうか、聞いた話なんですけど、思い出して、中学では同じクラスじゃなかったから、
まゆみ　あぁ、
・・・
直枝　でも、届け出、出してからの方が、よかったんじゃないですか？
まゆみ　え？
直枝　だって、出したら、もうねぇ、恋人っていうか、あれ？
まゆみ　えぇ、でも、最後の記念に、
直枝　あぁ・・・まぁ、そうか。
勇人　まぁ、昭和のうちにとは思ってるんですけど、
直枝　あぁ、
勇人　ま、けじめって言うか、
直枝　はぁ、

＊千寿子、上手奥から登場。
３・２・４

直枝　あ、きた。
千寿子　どうも、
直枝　この人です、この人、
まゆみ　あぁ、
直枝　杉原さん、
まゆみ　はい。
千寿子　こんにちは、
勇人、まゆみ　こんにちは、
直枝　もうご存じなんですよね、
勇人　はい。
千寿子　え、なに？
直枝　今、シミチズの武勇伝、話してたの、
千寿子　あぁ、
直枝　中学の時のね、金魚の話、
千寿子　え？
直枝　金魚、手でつかんだんでしょう。
千寿子　あぁ、
直枝　私も知らないんだけど、テンちゃんたちとか
　から聞いて、
千寿子　あぁ、
直枝　ねー、すごいよねー、都会育ちだったのに、
千寿子　・・・
直枝　あの、杉原さんは、高校の時も、ここって時
　に、ものすごく大胆で、すごかったんです。
まゆみ　あぁ、
千寿子　そんなことないでしょう。
直枝　あ、あ、この二人もすごいの、
勇人　え？
直枝　聞いた？
千寿子　え、なに？
直枝　離婚旅行だって、
千寿子　え？
直枝　離婚するんで、記念に旅行にいらしたんだっ
　て、
千寿子　はぁ、
勇人　えぇ、まぁ、
千寿子　そうだったんですか、
勇人　はい。
千寿子　え、でも、
直枝　うん？
千寿子　さっき、なんかプールで、
直枝　☆なになに？
勇人　☆あぁ、
千寿子　なんだか、とっても仲がよかったって、
直枝　だから、仲いいのよ、離婚だけど、
勇人　すいません。
千寿子　いえ・・・それは、でも、難しいですね、
勇人　え？
千寿子　なんて言っていいのか、
勇人　はぁ、
千寿子　いや、だって、新婚旅行だったら、おめでと
　うございますとか言えるけど、
勇人　あぁ、あぁ、
まゆみ　あぁ、
勇人　お気遣いなく、

＊町田、上手前から、カクテルグラスをお盆に載せて登場。

町田　お待たせしました。（グラスを渡す）
直枝　ありがとうございます。
町田　どうぞ、
直枝　はい。
町田　あと、これ、お渡ししていいですか？
直枝　え？
町田　ＦＡＸ届いてましたので、ご主人様に、
直枝　あぁ、あぁ、すいません。
町田　いえ・・・沼岡様、お待たせしました。
勇人　はい。
町田　どうぞ、テラスの方へ、
二人　はい。
町田　どうぞ、
まゆみ　☆じゃあ、お先に、
直枝　はい、どうぞ、
勇人　失礼します。

町田　☆何か、お持ちしましょうか、食前酒、
千寿子　あ、私はいいです。
町田　そうですか？
千寿子　主人が来てからで、
町田　かしこまりました。
（立って待っている勇人とまゆみに）
あ、あ、どうぞ、テラスの方、もう準備できてますので、
勇人　はい。
まゆみ　それじゃあ、
千寿子　あとで、また、
まゆみ　はい。

＊勇人、まゆみ、上手前に退場。

千寿子　もう行っても大丈夫ですか、私たちも？
町田　あぁ、はい、じゃあ、準備させます。
千寿子　まだ、揃ってないんだけど、
町田　はい、でも、すぐ、
千寿子　えぇ、
町田　失礼します。
千寿子　お願いします。
町田　失礼します。
直枝　よろしく、

＊町田、上手前に退場。
３・３・１

直枝　・・・
千寿子　すごかったのよー、
直枝　うん。
千寿子　あの二人、
直枝　えぇ、
千寿子　もう、全然分かんない、
直枝　あれ、ご主人は？
千寿子　シャワー浴びてる、
直枝　あぁ、
千寿子　私先に浴びたから、
直枝　うん、
千寿子　おたくは？

千寿子　なんだか、蝶整理してる、
直枝　え？
千寿子　捕ってきた蝶をね、すぐにどうにかしないといけないみたい。
直枝　あぁ、そうか、
千寿子　いま、来ると思うけど、
直枝　うん。
・・・・
直枝　いいわね、ここ、気にいっちゃった。
千寿子　そう。
直枝　うん、景色もいいし、
千寿子　そうね、
・・・・
直枝　明日、どうしようかって話してたんだけど、
千寿子　あぁ、
直枝　ジャングルクルーズを薦められたんだけど、
千寿子　あぁ、いきましょうか。
直枝　そう？
千寿子　朝、早く起きないといけないけど、
直枝　それは、大丈夫だけど、
千寿子　あと、午後からは、エステとかで、ゆっくりして、
直枝　あぁ、いいけど、主人がどうだか、
千寿子　旦那同士は、ゴルフでもさせておけば、
直枝　あぁ、
でも、シミチズたちは、いっつも行ってるんでしょう、いろんなとこ。
千寿子　うーん、いっつもってわけじゃなくて、日本からお客さんが来たときとかね、やっぱり、
直枝　あぁ、そう。

千寿子　主人は、よく奥の方まで行くけど、蝶とりに、私は、ここにいることが多くて、
直枝　そうなんだ、
千寿子　主人が山降りちゃうと、もうほとんど外出ないし、
直枝　え？
千寿子　運転もできないから、
直枝　え、どういうこと？
千寿子　彼は普段はＫＬにいるでしょう。
直枝　シミチズは一緒じゃないの、
千寿子　一緒に降りるときもあるけど、
直枝　うん。
千寿子　半分くらいかな、下は暑いからね、
直枝　あぁ、そうか。
千寿子　向こうに、メイドさんもいるし、
直枝　うん・・・、
千寿子　女もいるし、
直枝　・・・？
千寿子　うん。
直枝　え？
千寿子　バンコクにもいるみたい、
直枝　あぁ・・・そう、
千寿子　バンコクのは若い、十九歳とか、たぶん。
・・・・
千寿子　二人で、日本で暮らせるなら、日本で暮らした方がいいんじゃないかな・・・、
・・・・
直枝　あぁ、ごめんなさい、せっかく来てくれたのに、
千寿子　ううん・・・こっちこそ・・・ごめん。
直枝

千寿子　まぁ、うちの場合は、そうだっていうだけで、
直枝　うーん、
千寿子　高木さんとこは、大丈夫でしょう、ご主人、
真面目そうだし、
直枝　・・・別れるの？
千寿子　わかんない・・・日本の家も売っちゃったし
・・・帰るところもないし・・・
直枝　そんな、
千寿子　こっちに来てる奥さんたちで、困ってる人多
いみたいだけど、バンコクとか、特に、
直枝　あぁ、そう。
千寿子　なんだか、よく見えるんじゃない、男の人に
は、こっちの女性は、ハイハイっていうこと
聞いてくれるし、
直枝　あぁ、うん。
千寿子　お金の力だけなのに、
直枝　うん。
・・・
千寿子　まぁ、私も、お金で、エステとか行って、マ
ッサージしてもらうんだけど・・・女王様み
たいに、寝ながらジュース飲んで、雑誌のペ
ージもめくってくれて、こうやって扇がれて、

＊中岡誠司、野間ひかる、上手奥から登場。
３・３・２

誠司　△何だ、じゃあ、本当に隣じゃない。
野間　△そうですね、
誠司　△え、じゃあ、今度お昼一緒に行きましょう
よ。
野間　△はい、ぜひ、
誠司　お待たせ、
直枝　あぁ、
野間　★お待たせしました。
千寿子　いえ、まだ、うちの主人も、
野間　あ、え、まだお戻りじゃないんですか？
千寿子　いえ、もう帰ってきてはいるんですけど、
野間　あぁ、
千寿子　シャワー浴びたりとか、
野間　えぇ、
千寿子　☆もう来ると思うんですけど、
野間　はい。
直枝　☆一緒だったの？
誠司　うん？
直枝　野間さんと？
誠司　あぁ、いま、そこで一緒になって、
野間　はい。
直枝　あぁ、
野間　本社のオフィスがビルが隣で、
直枝　へー、
誠司　いいとこですねぇ、
千寿子　えぇ、
誠司　まぁ、たまには、こういうとこもいいね、
直枝　うん。
千寿子　でも男の人には、少し退屈じゃないですか？
誠司　あぁ、どうでしょう。
千寿子　もっと、お年寄りなら、静かで、あれですけ
ど、
誠司　まぁ、そうかも、新しい趣味を、

野間　★杉原さんみたいに、ＫＬとかにお住まいになって、こちらで週末過ごされる方もけっこういらっしゃいますよね、
千寿子　えぇ、まぁ、
誠司　ま、でも杉原さんとこは、商売もあるから、
千寿子　えぇ、
野間　最初は、日本と行ったり来たりで、だんだん、こちらに来るという方も多いですよ。
誠司　ま、うちも、それは、
直枝　ま、ま、いま、すぐに具体的って言うか、現実的な話をしなくてもね、
野間　えぇ、はい。
直枝　オーストラリアとかも行ってみようと思って、
千寿子　あぁ、多いらしいもんね、あっちも、
直枝　うん、そっちの説明会にも行ってみたんだけど、
誠司　まぁ、でもなぁ、物価のこと考えるとねぇ、こっちは半分以下でしょう、
千寿子　あぁ、えぇ。
誠司　その分贅沢できるっていうか、ま、贅沢はしなくていいんだけど、余裕っていうか、
千寿子　はい。
直枝　でも、病気とかなったら、
野間　あ、あ、あのいまは、こちらでも十分対応できますよ、ＫＬには日本語のできる医師もたくさんいますから、
直枝　あ、ごめんなさい、そういう意味じゃなくて、
野間　いえ、
誠司　なに、おまえがまずマレーシアって言ってたんじゃないの、
直枝　そうだけど、
誠司　なに、もう来たら、いやになっちゃったの？
直枝　違くて、
誠司　暑いのがダメなんだろう、
直枝　違うわよ、
誠司　なんだよ、
直枝　もういいわよ、
誠司　え、え、なに？
直枝　・・・
誠司　それ、
直枝　なに？
誠司　なんか、ＦＡＸ来たって、
誠司　あぁ、あぁ（中身を見て）うわ、すげ、日経平均三万円超えたよ、
誠司　・・・天皇陛下死にそうだって言うのに、みんな株は買いますからね・・・かんぱーい。
野間　・・・あの、ま、ゆっくり、ご覧いただいて、
千寿子　・・・もっと涼しい、標高の高い方もありますから、
野間　・・・すいません。
誠司

＊幸三、上手奥から入ってくる。
３・３・３

千寿子　あ、来た。
幸三　どうもお待たせしました。
直枝　あぁ、

千寿子　うちの主人です。
誠司　どうも、中岡です。
幸三　すいません、どうも留守しまして、
誠司　いえ、こちらこそ、お楽しみのところ、
幸三　いやいやいや、
野間　どうぞ、ここ、
幸三　はいはい。おー、野間さん、相変わらず、お美しい（Gに座る、野間はFに）
野間　ありがとうございます。
千寿子　こっちが旧姓高木さん、直枝さん、
幸三　あぁ、
直枝　こんにちは、
幸三　はじめまして、いつも千寿子がお世話になっております
直枝　そんな、なにも、
幸三　★よろしくお願いします。
直枝　こちらこそ、
幸三　お目にかかれて光栄です・・・どうぞどうぞ、
誠司　はい。
幸三　もう、あれですか、こちらに移ってこられる？
誠司　いや、まだ、それは、
幸三　え、え、どうして？
誠司　☆いや、
千寿子　☆今回は、まだ下見だから、
幸三　そりゃ、下見は下見だろうけどさ、
千寿子　え？
幸三　ま、今のところ、マレーシアでここよりいいところはないと思いますよ。
誠司　あぁ、

幸三　KLにも近いし、
誠司　えぇ、
幸三　施設も新しいですからね、
誠司　はい。
幸三　最高のサービス！
誠司　はぁ、
幸三　（野間に）ちょっと褒めすぎか、
野間　ありがとうございます。
千寿子　でも、他も考えられてるんだって、
幸三　なに？
千寿子　オーストラリアとか、
幸三　あぁ、でも、どうかな、
千寿子　えぇ？
幸三　あそこはね、健康的だけど、面白みがないんじゃないですか？
誠司　あぁ、まぁ、
幸三　僕も、何度か行きましたけど、
誠司　あ、あ、そうですか、
幸三　まぁ、スポーツとかはいいんでしょうけどね、
誠司　えぇ、
幸三　でもスポーツとかも、いまはマレーでもできますからね、スキューバーとか、ゴルフはもちろん、スキューバじゃなくて、なんだ、パラグライダーか、
千寿子　あぁ、
誠司　はい。
野間　ダイビングはペナンとかですね。ペナンも多いです。日本人の方、いま。
誠司　はい。
幸三　蝶もですよ、オーストラリアはたしかに珍し

誠司　い蝶はいるんだけど、種類が極端に少ないですからね、
千寿子　えぇ、
幸三　蝶は関係ないでしょう。
たとえば、蝶を例にしても、たとえば生活が単調になりがちだってことでしょう、
千寿子　変なの、
幸三　蝶だけに、単調！
・・・
幸三　とにかく、オーストラリアは刺激がない！
スティミレーション！
直枝　えぇ、
誠司　まぁ、たしかに、私たちも、時間を持て余すんじゃないかと思って、
幸三　はい。
誠司　リゾートとか、あんまり、慣れてないでしょう。
幸三　えぇ、そうなんです。セミリタイアっていっても、日本人は生真面目ですからね、そんなに、白人みたいに、じっとして、ぼーとしてられるのかってことです。
誠司　はい。
幸三　人によるでしょうけど、
直枝　でも、だったら、日本にいても・・・、
誠司　だから、そう言っちゃうと、もともとそうなんだけどさ、
直枝　うーん、
幸三　あ、いや、
千寿子　まぁ、それも含めて、お考えになった方が、
誠司　えぇ、
幸三　いやいや、だからこそ、年齢にあった、刺激と、安らぎのある、マレーシアへ、ようこそ！　スラマ・ダタン！　ダターン！
誠司　はぁ、
幸三　あれあれ？
誠司　バンコクやシンガポールも、よく行かれるんですか？
幸三　えぇ、バンコクはうちのグループ会社があるんで、ときどき、
誠司　あぁ、
直枝　バンコクも多いですよね、移住する方、
幸三　もちろん、バンコクの方が多いでしょう、あとチェンマイとか、
直枝　えぇ、
幸三　チェンマイは美人の産地です。
誠司　あぁ、
幸三　よくご存じでしょうけど、
誠司　いや、私は、あんまり。
幸三　蝶もいいです。
誠司　はい。
幸三　小ぶりですけど、マニア向けのいいのがいます。
誠司　あぁ、
野間　バンコクは、日本人六万人って言われてますけど、いまは大気汚染とかがひどくてですね、あまり、お薦めはできません。
誠司　でも、六万人っていうのはすごいな、
幸三　うちの会社も、ＫＬでは企業向けですけど、バンコクでは、個人関係の書類処理の相談も多いです。

誠司　あぁ、それは、やっぱりトラブルとか、いろいろ？
幸三　いやいや、一番多いのは免許証ですね、
誠司　え？
幸三　運転免許、
誠司　あぁ、
幸三　あと、結婚です。これはいろいろ大変なんです、結婚資格宣言書とかですね、戸籍関係はもちろん、在留資格認定書、所得証明書、タイの女性の側の親族一覧表までいります。大変な書類の数です。
誠司　★うわぁ、それは、
幸三　偽装結婚をチェックするでしょう、大使館としては、
誠司　あぁ、そうか。
幸三　で、さらに、そのあとに、トラブルですね。
誠司　え、え？
幸三　やっぱり、遺産目当てだったりとかですね、女性の方が、あとその遺産目当てだっていうんで、日本にいる子どもたちが反対して、駆けつけてきて、
誠司　あらららら、
幸三　もう修羅場です。日本大使館の前で、
誠司　うわー、
幸三　恥ずかしいらしいです、一緒について行く方も、
誠司　でしょうね、
幸三　まぁ、ＫＬでは、そういうのは、まだあんまりないですけどね。
誠司　ええ、
幸三　ま、お互い、気をつけて、
誠司　はい。
幸三　セミリタイヤや定年移住は、夫婦仲がいいのが基本です。
誠司　はぁ、
幸三　一緒にいる時間が、圧倒的に長くなりますからね。
誠司　ええ、
幸三　毎日が、新婚旅行みたいなもんです。
誠司　おぉ、
野間　それは、中岡さんの所は、大丈夫です。
幸三　いや、そうでしょう。お見受けしたところ、
誠司　いやいやいや、
・・・
千寿子　じゃ、そろそろ行きましょうか？
直枝　あぁ、そうね。
幸三　もういいの？
千寿子　うん、大丈夫みたい、
幸三　あ、そう、
千寿子　夕日見るなら、もう行かないと、
幸三　そうかそうか、
誠司　あ、じゃあ、行きましょう。
幸三　テラスからの夕日がねぇ、最高なんですよ、
誠司　はい。
幸三　ジャングルがね、水平線のように広がっています。
誠司　おぉ、
幸三　ここでしか、見れない景色です。
誠司　はい。

幸三　緑の海に、夕日が沈んでいく・・・そこに、
一頭のアカエリトリバネアゲハ。
・・・
千寿子　行きましょうか？
誠司　はい。
幸三　おう、行こう行こう、
誠司　行こうよ、
直枝　うん。
千寿子　行きましょう。
直枝　はい。
幸三　食事の後に、蝶のコレクションを、観に来てください。
誠司　あぁ、はい、ぜひ。
千寿子　▲お疲れなんだから、
幸三　▲ちょっと、ちょっとだけ、
誠司　▲楽しみです。
幸三　▲ありがとうございます。
千寿子　▲ご迷惑でしょう、
誠司　▲いえいえ、
幸三　▲まぁコレクションって言うのは、男のロマンですからね。
誠司　▲はい。
幸三　▲男の飽くなき欲望というかですね。
誠司　▲なるほど、

＊全員、立って、上手前に。

十秒、空白。

好江、上手奥から登場。

ソファＤに座る。

五秒後、保奈美、上手奥から登場。
向かいのソファＡに座る。
３・４・１

好江　なんか飲む？
保奈美　え？
好江　頼むと、持ってきてくれるよ。
保奈美　いい、いらない。
好江　あ、そう。
・・・
好江　あんなに泣かなくてもいいじゃない。
保奈美　えぇ、だって、
好江　大丈夫だって言ってんだから、
保奈美　そんなこと言っても、
好江　治る人だって、たくさんいるんだから、
保奈美　でも、じゃあ、せめて日本帰ってきてくれればいいのに、
好江　うん・・・そうなんだけど、
保奈美　説得しようよ、もうちょっと、
好江　うーん、
・・・
好江　どうしてだろう、
保奈美　え？
好江　どうして、そんなに帰りたくないんだろう。
保奈美　うーん。
好江　帰って、きちんと治してから、また来ればいいのに。
保奈美　でしょう、

好江　どうしてだろう・・・なんか理由があるのかな。
保奈美　寒いのが嫌っていうのは分かるけど、
好江　うん。
・・・
保奈美　お姉ちゃん、子どもできないの？
好江　え、どうして？
保奈美　だって、孫でもできれば、帰ってくるんじゃない。
好江　あぁ、私も、それ少し考えたんだけどね、
保奈美　うん。
好江　じゃあ、あんた、つくんなさいよ、
保奈美　えぇ？
好江　私、もう無理だから、
保奈美　それで、お父さんが帰ってくるなら、作るけど、
好江　おー、
保奈美　でも、うち、また海外なんだ。
好江　え、どこ？
保奈美　デュッセルドルフ、
好江　え、どこそれ？
保奈美　西ドイツ、
好江　ふーん、
・・・
保奈美　でも、そんなにこっちが好きなようにも見えないよねぇ、お父さん、
好江　そうなのよ、
保奈美　電話かけても、退屈だとか、塩辛送れとか、
好江　お父さんは、そんなのばっかだもんね、
保奈美　うん。
保奈美　もう全然わかんない、
・・・
保奈美　おなかすいたね、
好江　うん。
保奈美　中途半端になっちゃったから、
好江　うん・・・今日はマレーシア料理だって、
保奈美　お父さん、普通に食べられるのかな、
好江　さぁ、どうだろう。
保奈美　タバコはやめたって言ってたけど、さすがに、
好江　うん。
保奈美　でも、お母さん、普通に吸ってたね。
好江　あんたもやめなさいよ。
保奈美　はいはい。
好江　せめて、
保奈美　（入ってくる明に）おかえりなさい、
好江　☆え？

＊三橋明、恵美子、下手から登場。
３・４・２

明　☆あぁ、どうも、
好江　おかえりなさい、
明　どうも、
恵美子　こんにちは、
明　これから、お食事ですか？
好江　はい。
明　あぁ、じゃあ、一緒だ、
好江　えぇ、
恵美子　私、ちょっと見てきますよ、準備できてるか。
明　大丈夫だよ、七時頃って言ってあるし、

恵美子　うん、でも、
明　大丈夫だって、
恵美子　また、待たされると嫌だから、

＊恵美子、上手前に退場。

明　心配性で・・・散歩に出たんですけど、もう日がかげってきてしまって、
好江　あぁ、
明　僕がこっちに来たころなんかは、夜は虎が出るから、暗くなったら外に出るなって言われてたんです。
好江　えぇ、そうなんですか？
明　えぇ、もう、ずいぶん昔の話、
好江　ずっといらっしゃるんですか？
明　え、僕ですか？
好江　いや、娘さん、
明　あぁ、あぁ、こっち来て、えっと、２週間くらいです。
好江　あぁ、
明　今回は、どれくらい？
好江　五日間です。妹は一週間、
保奈美　はい。
明　あぁ、
・・・
保奈美　あの、もう皆さん、父の病気のことは、ご存じだって聞いたんですけど、父から、
明　あぁ・・・えぇ、まぁ。
保奈美　どうなんでしょう？
明　うーん、どうって言われても、まぁ、その詳しいところはお聞きしてないんで、私たちも、
保奈美　はぁ、
明　ただね、ここでは、昔のことは話さないっていうのと、話さないっていうか聞かないですね、無理に、聞かないっていうのと、
保奈美　えぇ、
明　あと、いまのことはね、逆に、特に健康のこととかは、お互い知っておいた方がいいから、できるだけ話すっていうのと、二つ、何となくみんな、そうしてて、
保奈美　あぁ、
明　ほら、ご病気かどうか知ってないと、お酒とかゴルフとか、誘いにくいじゃないですか、
好江　あ、そうか、
明　誘われて、断り続けても気まずくなるでしょう。
好江　はい。
明　なんか、そういうところまで、日本人らしいって言われるんだけど、
好江　いえ、でも、そうですよね。
保奈美　あの、
明　はい。
保奈美　父が、日本に帰りたくないって言うんです。
明　あぁ、
保奈美　理由を聞いても、よく判らなくて、
明　・・・えぇ。
好江　シベリヤ帰りなんで、暖かいとこじゃなきゃいやっていうのは聞いてるんですけど、
明　ああ、ええ。

好江　でも、それだけじゃ、
明　ええ、
好江　あの、なにか、心当たりっていうか、
明　うーん、
好江　いや、あの、
明　どうでしょう、一人ひとりの気持ちのことは、難しいから、
好江　えぇ、はい。
明　でも・・・日本が嫌いなんだと思います、たぶん。
・・・
明　いい国なんだと思います・・・清潔で、穏やかで、暮らしやすい・・・、まぁ、そういう国を作ってきたつもりだったんだけど・・・だいいち、自分の生まれた国ですからね・・・砂漠で育った人は、砂漠が一番落ち着くらしいから、
保奈美　えぇ、じゃあ、
明　でも、嫌いなんです・・・それは、分からないんです、どうしてだか・・・しんどいもんですよ、この歳になって、自分の生まれた国が嫌いだって分かるのは。
好江　えぇ、
明　でも、もうここから離れたくないんです。日本とは、できるだけ関わりたくないっていうか、
好江　はい。
明　いや、これは僕の話で、僕の、僕が、そうだっていうんで、磯崎さんは、分かりませんけど・・・、

好江　え、あぁ、いえ・・・ありがとうございます。
明　いや・・・まあ、でも、磯崎さんの方がそうかな、
好江　え？
明　磯崎さんの方が、一度、国に捨てられてますからね、
好江　あぁ、
・・・
明　まぁ、でも、昭和が終われば変わるのかな、
好江　あぁ、
保奈美　え、三橋さんは、変わりますか？
明　あ、僕は無理、僕はもう、ここでいいです。
・・・
明　こういうの、引きこもりって言うんでしょう、最近、日本では、僕みたいなの。
保奈美　え、え？
明　なんにもしたくなくなっちゃうの、
保奈美　えぇ、そうですか、そうかな。
明　この国が、そんなに気に入ってるわけじゃないんですよ・・・理想郷みたいに宣伝されるけど、ジャングルなんて、開発で、どんどんなくなってってるし・・・でも、ここだけは守られてるから・・・もういいでしょう、何か、何もしなくても、私たちは、
保奈美　はい。
明　静かに、していられれば、
・・・

＊勇人、上手前から登場。下手のテーブルに座る。頭を抱えている。

好江　・・・
三橋さんって、昔、品川にお住まいだったんですよね？
明　えぇ、あれ、話しましたっけ、
好江　あの、前の時、一緒に食事させていただいたとき、少しだけ、
明　あぁ、そうですか？
好江　いや、夫の会社の新しいオフィスが品川なんで、
明　あぁ、そう。
好江　はい。
明　いや、すごいんでしょう、ビルが、最近、急に、
好江　えぇ、
明　ねぇ、
好江　品川の、どこら辺ですか？
明　僕はね、品川っていっても少し先の北品川の方です。
好恵　あぁ、はい。
明　いま、美術館とかのある。
好江　はい。
明　小さな自転車屋やってたんですけどね、あそこら辺が道路の拡張工事で、立ち退きにあって、
好江　あぁ、
明　バカみたいなお金もらって、ご近所はたいていい商売たたんでマンションに引っ越したんだけど、僕は、こっちに来ちゃって、
好江　そうだったんですか？
明　ちょうど、女房が急に亡くなって・・・娘には反対されたんですけど、
・・・
明　一度、来たことがあったんです、遺族会で、まだ両親が元気な頃、
好江　あぁ、

＊磯崎健一、郁子、上手奥から登場。
３・４・３

明　こんなに長くいるとは思わなかったんですけど、もう七年です。
好江　えぇ、
健一　どうも、
郁子　お待たせ、
保奈美　うん。
好江　いま、お話伺ってて、
健一　あぁ、すいません。
明　いえいえ、こちらこそ、年寄りの相手していただいて、
好江　いえ、
保奈美　相談にのっていただいてたの、
郁子　え？（ソファＡに座る）
保奈美　どうしてお父さんが、日本に帰りたがらないのかって、
郁子　そんな、
好江　病気のことも、
郁子　あぁ、
明　いや、
健一　すいません、どうも、（ソファＤに座る）

明　いやいや、僕の話をしただけで、
保奈美　あの、分からないですけど、全部は、
明　えぇ、
保奈美　でも一週間いるんで、なんか話したいと思います、父と。
明　えぇ、
健一　はい、お願いします。
保奈美　はい。
郁子　申し訳ありませんでした。
明　いえいえ、こちらこそ、本当に。
郁子　すいません。
健一　★あ、そうだ、そうだ、
保奈美　なに？
健一　さっき、夢見たよ、昼寝してたら、
保奈美　うん。
健一　思い出した。
郁子　珍しいわね。
健一　うん、セノイ効果かな、
好江　え、なにそれ？
健一　そういう原住民、修行すると夢をコントロールできるようになるんだよ。
好江　ふーん、
郁子　え、で、どんな夢見たの？
健一　二人が来る夢見た。
郁子　え？
健一　この二人が来る夢、
郁子　それ、そのまんまじゃない。
健一　だから、予知夢だ。
郁子　バカみたい、
健一　どうして？
郁子　ねぇ、
好江　うん。
郁子　予知夢っていうのは、なんか、飛行機が落ちるとか、そういうのを予言するんでしょう、
健一　だから、来たじゃない、二人、
郁子　それは分かってたことでしょう。
健一　えー？
郁子　☆えーじゃないわよ、
保奈美　バカみたい、
健一　あれ？

＊恵美子、上手前からワイングラスを二つ持って登場。

明　☆おう、
恵美子　いつでも大丈夫だって、
明　あ、そう。
恵美子　これ（グラスを渡す）
明　あぁ、ありがとう。
恵美子　（健一たちに）あぁ、すいません、私たちだけ、
好江　いえいえ、
恵美子　準備できてるみたいです、皆さんの分も。
郁子　あぁ、ありがとうございます。
健一　☆☆じゃあ、行くか。
郁子　本当は、コテージで家族で食事して、それから病気の相談するはずだったのよ。
好江　うん。
郁子　もう、全部話しちゃうんだもん、お父さん、
健一　いいだろう、別に、

郁子　いいですけど、
好江　いいわよ、外の方が、気持ちいいし、
郁子　まぁね、

明　☆☆（ワインを飲んで）おいしいね、
恵美子　モーゼルワインだって、
明　え？
恵美子　ドイツのワイン、
明　あぁ、あぁ、

明　みんなで食べましょうよ、せっかくだから。
健一　えぇ、はい。
明　ね、
保奈美　☆☆☆はい。
郁子　☆☆☆すいません。
恵美子　いえ、
明　あ、あ、磯崎さんのお嬢さんなんかはあれかな、
好恵　え？
明　ちょうど、ハリマオ世代かな、
好恵　え、あぁ、
明　怪傑ハリマオ、
好恵　あぁ、
明　テレビ番組、
好恵　ありましたね。
健一　あった、あった。
郁子　えぇ、
好恵　え、なんですか？
明　いや、さっき、杉原さんの奥さんから聞かれて、ハリマオ知らないんだって、

健一　あぁ、
郁子　あぁ、千寿子さんとこ、お子さんがいらっしゃらないから、
健一　☆旦那は知ってるよな、きっと、
郁子　えぇ、

好江　☆さっき、最初にあった人、
保奈美　あぁ、
好江　杉原さん、
保奈美　うん。

健一　あれ、三橋さんは、本物の方は？、
明　え、もちろん、
健一　そうですよね、
明　一番、無邪気にだまされてた世代ですから、
健一　えぇ、
好恵　本物って？
健一　モデルがいたんだよ、ハリマオは、
好恵　へー、
明　マレーの虎、ハリマオ、
健一　はい。
明　南方戦線は、派手でしたからねえ、最初、
健一　ええ、
明　パレンバン空挺部隊の落下傘攻撃、
健一　そうそう、空の神兵、
明　♪見よ落下傘、空に降り
憲一　♪見よ落下傘、空を征く
明　油田を制圧したんだよ、インドネシアの、パラシュートで、
恵美子　へー、

健一　♪エンジンの音、囂々と、
明　加藤隼戦闘隊
健一　隼はゆく、
郁子　やめなさいよ、
健一　はい。
明　でも、本当、最初だけだったみたいですけどね、
健一　えぇ、だから、ハルピンでは、南方に配属されたらやばいって、けっこう早くから言われてたんですよ。
明　あぁ、やっぱり、
健一　地獄だって、
明　えぇ、
健一　まぁ、僕たちは、後から地獄が来たんだけど、
明　ああ、
郁子　じゃあ、軍歌なんか歌わなきゃいいのに、
健一　はい、すいません。
明　すいません。
郁子　あ、いえいえ、
勇人　・・・
勇人　♪まっかな太陽　燃えている
勇人　・・・（全員、勇人の方を見る）
勇人　いや、僕、ジャストの世代です、テレビの方の。
健一　あぁ、
勇人　軍歌じゃなきゃ、歌ってもいいですか？
郁子　え、ああ、どうぞ、

勇人　♪（『怪傑ハリマオ』を歌う）
明　・・・
明　♪正しいものに味方する、
健一　・・・
健一　正しい者って言われてもなぁ、
勇人　・・・
勇人　あとあと、「ジンジンジンタンジンタカタッタッタ」
好恵　あぁ、ありましたね。
勇人　そうそう、ハリマオって聞くと、仁丹食べたくなっちゃうの、
明　あぁ、えぇ。
郁子　あったあった、
健一　昔ばっかり思い出すくせに・・・戻りたいとは思いませんね。
明　夢と一緒でしょ、あんなもん。
健一　あぁ、なるほど、
恵美子　あんなもんって？
明　思い出、
恵美子　ふーん、

＊まゆみ、上手前から登場。

まゆみ　何してんの？
勇人　あぁ、
まゆみ　恥ずかしいでしょう、
勇人　ごめん。
まゆみ　すいません。
健一　・・・
健一　いえいえ、

まゆみ　なんか、私たちのことだと思われるでしょう。
勇人　え、え？
まゆみ　あの、違うんです。
・・・・
明　はい？
まゆみ　天皇陛下の話してたら、急に泣き出しちゃって、
・・・・
健一　あぁ、
勇人　いや、そんな、愛国者じゃないんですけど、
健一　えぇ、
・・・・
勇人　でもでも、ちょうど帰国の日に亡くなったりしたら、どうしようかと思って、
明　え？
勇人　だって、浮かれた格好とかで成田ついたら、まずくないですか？　こんなんで、
明　あぁ、そうか。
勇人　だから、一応、僕、喪服持ってきたんですよ。
明　あぁ、なるほど、
・・・・
明　ま、心配ですよね、
勇人　はい。
・・・・
まゆみ　戻ろう。
勇人　うん。
・・・・
まゆみ　失礼しました。
勇人　失礼しました。
・・・・

まゆみ　スープが出てきたよ。
勇人　え？
まゆみ　なんか、ココナッツ味の、
勇人　へー、辛い？
まゆみ　わかんない、まだ飲んでないから、
勇人　なんだ、
まゆみ　待ってたんでしょ、

＊勇人、まゆみ、上手前に退場。

保奈美　どうなっちゃうんだろう、
好江　ね、
明　なんか、いろいろ、複雑なみたいですよ。
保奈美　え？
明　なんだか、離婚するとか、
保奈美　いや、そうじゃなくて、
明　え？
保奈美　昭和が、どうなっちゃうんですか？
明　ああ、
郁子　どうにもならないわよ。
・・・・
明　明日、身体のお加減がよかったら、峠まで行ってみませんか？
健一　え？
明　みなさんで。
健一　あぁ、はい。
明　天気がよければ、南シナ海が見えますよ。
好江　へー、
健一　せっかくなら、日の出前に行きましょうか？
明　あぁ、

郁子　そんな、大丈夫？
健一　大丈夫だよ、
郁子　だって、
健一　病人扱いするなって、
郁子　病人でしょう、
明　まぁ、これだけ元気なら、大丈夫ですよ。
保奈美　はい。
健一　・・・・
大丈夫だよ、天皇より先には死なないからね、
俺は、
郁子　そうね。
・・・・
明　車、予約しとこう、じゃあ
恵美子　うん・・・（好江たちに）朝は、鳥の声が綺麗ですよ、
好江　あぁ、
恵美子　もうシャワーみたいに、降ってくる感じ、
好江　わー、、
恵美子　これなら、ずっといてもいいなって思いますよ。
好江　☆☆えぇ、
保奈美　☆☆はい。
明　おまえは帰りなさい、早く、
恵美子　もうーうるさいなぁ、（好江に）私には、帰れ、帰れって言うんです・・・
好江　あぁ、
恵美子　一人だと寂しいくせに、
明　そんなことないよ、
恵美子　えぇ？
明　まぁ、でも、ね、
健一　えぇ、（娘たちに）そうそう、
好江　え、なに？
健一　帰らない、どこにも、
・・・・
明　ここに、いたいんだよ・・・。
恵美子　・・・・うん。
健一　えぇ、
明　ずっと、このまま、
健一　もう、どこにも行かなくいいだろう。、

＊溶暗

了